

社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法をめぐって：
アジア諸語版の試み(2018-2019)
—アジア諸語を対象にした CEFR 受容で見えてきたものと捉えがたいもの—

**Issues on the communication ability evaluation method
in consideration of socio-cultural characteristics:
Asian Language Prototype (2018-2019)
—What has been seen and What is hard to see
in the Acceptance of CEFR for Asian languages—**

研究代表者 富盛 伸夫
Nobuo Tomimori (Project Leader)

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
(3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan)

要旨: 「ヨーロッパ言語共通参照枠組み」(以下 CEFR) は 2001 年の公開以来、欧州地域から世界各地へと適用が拡大されつつある。現在の研究プロジェクトの問題設定では、CEFR のアジア諸言語への適用をするにあたっては、多様な言語・社会・文化的特質に合わせうる柔軟性を付与することが有効で、これによりアジア諸語のそれぞれにカスタマイズされた社会・文化的コミュニケーション能力評価方法を開発できるであろうとの認識を持っている。

本稿では第一に、数年間の調査研究で得られたデータ結果を分析する。第二に、アジア諸語の社会・文化的特質を特記事項として記述して、能力記述文に補足説明 (Asian Supplement) を付記する方法を具体化する。第三に、社会・文化的適切性 (Socio-cultural Appropriateness) を考慮したコミュニケーション能力評価法のための試作表を作成する。第四に、2019 年にアジア諸語教育担当者に対して行った「社会・文化的適切性」に関わるアンケート調査の結果と評価を総括して、今後の研究展望を探る。

Abstract: Since its publication in 2001, the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) has been expanding its application from Europe to the rest of the world. According to the current research project problem setting, it is effective to apply CEFR to Asian languages by giving them the flexibility to adapt to diverse language types, as well as to socio-cultural characteristics. We will have therefore the potential to develop customized methods for assessing socio-cultural communication skills.

In this article, we first analyze the data obtained from several years of research. Second, the social and cultural characteristics of Asian languages should be described as special remarks, and a method of adding supplementary descriptions (Asian Supplements) to the linguistic ability description should be efficient. Third, we will prepare a prototype table for communication ability evaluation, considering Socio-cultural Appropriateness. Fourthly, we will summarize the results and evaluations of a questionnaire survey on “Socio-cultural Appropriateness” conducted by Asian language education staff in 2019, and will explore future research prospects.

キーワード: ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)、アジア諸語の社会的・文化的特質、社会・文化的適切性、言語能力評価法、アジア諸語への付加説明 (Supplementary description)

Keywords: Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (CEFR), Social and cultural characteristics of Asian Languages, Socio-cultural Appropriateness, Assessment method for linguistic proficiency, Reference Level Description suitable for Asian languages, Supplementary description for Asian Languages

1. 本研究の問題意識と先行研究の経緯(-2019 年度)

ヨーロッパ連合(以下、EU)の言語教育改革の基盤をなす「ヨーロッパ言語共通参照枠組み」(Common European Framework of Reference for Language、以下 CEFR ; 刊行物は本稿では *CEFR2001*¹⁾)は、公開されてから約 20 年となろうとしている。現在、その実践面では世界各国に拡大しつつあり、言語教育の理念にも大きな影響を与えようとしている。反面、その導入に積極的な国々では CEFR が簡便な測定尺度として利用する意図がみられ、さらには汎用的利便性に目を奪われて、CEFR 本来の言語教育上の理念や意義が見失われかねないのが実態である²⁾。

近年、EU では世界各地の協力者を得て CEFR の見直しが進んでおり、2018 年 2 月には改訂・追補版 *CEFR, Companion Volume with New Descriptors* (以下、*CEFR2018*) を提示した。この新バージョンでは、CEFR の新たな重点化と方向性が読み取れるが、異言語間・異文化間のコミュニケーションにおける社会的・文化的側面が強調されるとともに、手話使用者を含む仲介者の能力記述文や複言語・複文化環境でのコミュニケーション能力について具体的かつ重要な指針が記述されていることは注目して良い。

筆者を研究代表者とする先行する科学研究費助成事業(科研費)による研究グループは、初期の数年間には EU 諸国での CEFR の受容と導入実態に関する調査をすすめ、続いて、非 EU 諸言語、なかでも我が国の外国語教育に深い関係のあるアジア諸語への受容様態に関する調査と問題提起を行ってきた³⁾。EU という比較的均質な言語・文化・社会的土壌で構想が生まれ育まれた CEFR が、果たしてアジア諸地域の言語教育にそのまま適用しうるかどうか、といった研究課題を設定した⁴⁾。数回の科研費研究を経て、現在アジア諸語にはその多様な言語および社会・文化的⁵⁾特質を考慮に入れた新たな能力評価記述方法を開発しつつある。以下では、我々のすすめた調査や研究実験の分析を通して、社会・文化的特質を反映したより有効なコミュニケーション能力評価方法の可能性を探りたい。

なお、本科学研究⁶⁾の目的と概要は、この中間報告書の巻末に掲載した「「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」の概要と活動実績(2018-2019)」(富盛伸

¹⁾ *CEFR2001* の本文は <https://rm.coe.int/1680459f97> を参照。

²⁾ Byram; Parmenter (2012) の各国における受容様態の報告を参照。

³⁾ 本稿に関わる研究は先行する以下の科学研究費研究プロジェクトで遂行されてきた。

科学研究費助成事業基盤研究(B) [50122643] 2015-2017 年度「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」(研究代表者富盛伸夫)

科学研究費助成事業基盤研究(B) 2012-2014 年度「アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究」(研究代表者富盛伸夫)。

科学研究費補助金基盤研究(B) 2009-2011 年度「EU および日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究」(研究代表者富盛伸夫)。

科学研究費補助金基盤研究(B) 2006-2008 年度「拡大 EU 諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」(研究代表者富盛伸夫)。

⁴⁾ 各国高等教育機関への調査報告は、富盛伸夫(2014a)、富盛伸夫(2015)に掲載されている。

⁵⁾ 本研究の課題名では「社会・文化的」として「社会」と「文化」の 2 つの概念を分離して並立的表現を用いているが、「社会的・文化的」という意味に同じとしてよい。しかし文脈により「社会文化的」という表現をとることがあるが、これは *CEFR2018* で強調されている社会言語的能力(Sociolinguistic competences)という概念の内に、社会的および文化的要因を合わせて社会言語的能力のうちに内包していると解釈する。ただし本稿で引用した文章中にある「社会文化」「社会・文化」については出典の表記のままにしておいた。

⁶⁾ 科学研究費助成事業基盤研究(B) 「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」(研究代表者富盛伸夫) 研究分担者は、藤森弘子(日本語)、南潤珍(韓国語)、田原洋樹(ベトナム語)、鈴木玲子(ラオス語)、上田広美(カンボジア語)、野元裕樹(マレーシア語)、スニサー・齋藤(タイ語)、岡野賢二(ビルマ語)、降幡正志(インドネシア語)、峰岸真琴(アジア諸語類型論および CEFR 適用妥当性研究)、根岸雅史(英語教育および英語能力評価法)、矢頭典枝(英語変種研究および CEFR 適用妥当性研究)、拝田清(アジア・オセアニア地域、CEFR 適用妥当性研究)。研究協力者は、荻原寛(フィリピンの社会言語学的動態研究)、内藤理佳(マカオ・ポルトガル語系話者の言語・文化・社会コミュニケーション研究)、アラールエルディーン・スライマーン(アラビア語圏の社会・文化的特質研究)、山崎吉朗(中等教育・生涯教育)

夫)に詳しいので、この章では割愛する。

1.1. 2014 年の学部学生を対象に行った学習者アンケート調査

本研究グループでは、2014 年から 2017 年にかけて、「定量的分析 (Quantitative Analysis)」、「直感的分析 (Intuitive Analysis)」、「定性的分析 (Qualitative Analysis)」の 3 種類の手法で検証作業を進めた。2014 年に東京外国語大学の学部学生の約 1/3 にあたる 1476 人を対象に行った学習者アンケート調査の結果から、EU 地域の言語などの学習者と比べてアジア諸語学習者の多くは、学習の進度、負担感、到達度などに大きなハンディキャップがあり、CEFR などの能力評価枠組みを一律に適用されることの不安・不満の反応が強くみられた。また、記述調査ではアジア諸語の学習者は、社会的あるいは文化的多様性が言語学習の到達段階に深く関与するという意識を持っているというデータが得られた⁷。

さらにアジア諸語圏の社会・文化的コミュニケーション能力記述項目に関わる調査を言語教育担当教員とともに行うことで、具体例の豊富な意見を聴取できた。これにより、書記体系や音声組織・文法構造などに多様性が大きいアジア諸語について、まず言語類型上の特徴から CEFR の利用には慎重さが必要であることが示唆された。さらに、談話ストラテジー・語用論的枠組みが大きく異なるアジア諸国の言語には、CEFR の修正あるいはカスタマイズなどの工夫がありえることも見えてきた⁸。

CEFR が EU ローカルな枠組みから脱皮できるかどうかという、CEFR 自体の可変性・柔軟性が問われている、という認識は CEFR のアジア諸語への適用可能に際して多様な言語・社会・文化的特質を考慮した新たな視点から CEFR 記述文の再検証へと向かった。

1.2. いわゆる「機能シラバス」から「社会・文化シラバス」へ

我々のアジア諸語教育を対象分野とした CEFR 研究では、東京外国語大学が開発した TUFUS 言語モジュールなどで採用されている「機能シラバス」を基礎とする 1 万余りのすべての会話文を分析した上で、アジア諸語の個別言語・文化に関与的な指標を抽出して「社会・文化シラバス」を提案した⁹。具体的には、これらの指標を従来の CEFR の能力記述項目に対応させ、EU の高等教育機関等で用いる Diploma Supplement 「補足説明文」から着想し援用した「社会・文化的な付加的特記事項 (Supplements)」を添付することで、CEFR の適用上の複数の枠組み調整を可能にする方策を研究してきた。

アジア諸語教育を担当する研究分担者・協力者の参加を得て 2017 年より現在までに進行中の作業工程は以下のである。本稿の内容はその成果発表といえる。

- (a) 各アジア諸語の社会・文化的指標の抽出をするための担当教員にヒアリング調査（朝鮮語、タイ語、ビルマ語、カンボジア語など 9 言語）と書面調査を行う。
- (b) 抽出し選別した社会・文化的コミュニケーション要素を「社会・文化シラバス」として CEFR の能力記述項目に組み込むための CEFR 対応表の設計をする。
- (c) アジア諸語版の社会・文化的コミュニケーション能力評価のための CEFR 対応表を開発し、アジア諸語教育の現場で学習者とともに検証する。

上記作業を通じてえられた観察と問題点は以下のである。

- (i) アジア諸語では発話の前提として対話相手との社会関係をまず認知・確認する必要があることが多い。自他の社会的・年齢的・親疎関係が判断できたら、学習言語の待遇表現を活用し、

⁷ 詳しくは富盛伸夫; YI Yeong-il (2016) および富盛伸夫; YI Yeong-il (2017b) を参照。

⁸ 特に、富盛伸夫, YI Yeong-il (2016) および、富盛伸夫, YI Yeong-il (2017a) を参照。

⁹ 詳しくは富盛伸夫; YI Yeong-il (2017a) および富盛伸夫; YI Yeong-il (2017b) を参照。

文脈によっては性差文体を駆使し、適切な人称詞・呼称の言語体系をコードスイッチングして操作する能力や高度な総合力を要する。社会役割を考慮した人間関係を反映するコードとしての呼びかけの称号選択能力は必須項目となる。相手に対する呼称をリアルな親族の名称を他人に語用論的・ポライトネス的な機能転化に利用するという言語操作はまさに Silverstein (1976) らの提唱する社会・文化コミュニケーション上の「シフター」(Shifters) である。その操作を習得することは特定社会への、そして文化的特質への、発話に必須な相互作用的な言語社会的行為となる。

言語によっては宗教者や王族に対する特有の待遇の文体や文語体を使用できるか、が重要であるという。ベトナム、ビルマ、タイ、カンボジアなどでは、自分や相手の親族名称を用いる人称詞・呼称、あるいはニックネームを人間関係や場の状況に応じて適切に使うことは、CEFR の A1 レベルから必須の能力である。本稿では後にとりあげるが教員の教育現場での悩みの大きなひとつである、という。

- (ii) 学習者は対話者の個人的領域にどこまで踏み込むことができるか? の判断が非ネイティブにはつきにくい。EU 諸語では A レベルで、相手の年齢・住まい・出身地・趣味・週末の行動など、かなりの個人情報を探ね、あるいは答える能力があげられている。他方、アジア諸語では学習対象社会での複雑な人間関係の様態がからみ、自分がどこまで相手の領域に踏み込み、何を話題化して良いか悪いのか、の線引きが困難なことが多い。このように、相手との心理的距離感や親疎関係を測る能力の「社会・文化的難易度」は決して低くない。相手との個人的な親しさを得るためにあえて踏み込んで尋ねる場合もある一方で、踏み込んで聞いてはいけないという各言語文化の「適切性」を考慮する言語態度は文化的感性の問題といえる。これについては、アジア諸言語地域の特性をそれぞれの言語について個別的に記述する作業が必要になるであろう。本稿で後述する「社会・文化的適切性」に関わる教員アンケート調査はこの目的でなされた。
- (iii) 世界知識 (Savoir) として、対象地域の社会的慣習・規範を学習する必要があるとともに、運用能力 (Savoir faire) がどの程度まであるかを評価する必要がある。広い意味では、CEFR2018 で重点化された「適切性」(Appropriateness)の能力に関係する。例えば、定価を明示しない商取引・売買では値段・品数交渉が原則である言語地域が多いが、言語的能力の行使とともに、その土地の商習慣に適した表現、値段交渉や妥協のプロセス、支払い方法のタスク・シーケンス・ストラテジーを含めたかなり高い運用能力を発揮できねば日常生活にも支障をきたす。
- (iv) ドメイン、語用論の方略に応じて文体・レジスターのスイッチングをする能力も必要である。書記体系と運用規則の複雑な言語の多いアジア諸語では、文章体と口話体との使い分けの難易度が高く、CEFR 導入に際しては特別の配慮が必要となる。また性差文体を持つ言語では、男女に完全に二分されているわけでもなく、言語運用上の方略的側面が重要因子であり、対話者との関係に配慮する社会・文化的能力のひとつでもあるという。アジア諸国の言語社会内では学習の必須項目として認定され文体コードの正しい選択と適切な使用能力は、CEFR の策定に組み入れるべきであろう。

我々のアジア諸語教育の中で「社会・文化的シラバス」を設計し CEFR-Asia with Socio-cultural Supplements を実装する方向は、「社会・文化的適切性」を考慮した異文化間コミュニケーション能力の育成と評価に有効であると考えている。このために、次の作業として、社会・文化的特質の指標の抽出と CEFR レベルの設定に入った。

1.3. TUFSS 言語モジュール・コーパスから抽出したアジア諸語に関する指標

本研究では、東京外国語大学が 21 世紀 COE 活動の成果物として公開している「TUFSS 言語モジュール」¹⁰をコーパス化してデータベースとして活用した。これは 2003 年以来開発が続いているオンライン言語学習プログラムで、その最大の特徴は 27 主要言語（加えて下位レベルの諸方言、諸変種、計 46 言語）の遠隔教材としての組み立てが通言語的観点から個々の言語の特質が把握できるように共通化しているところである。特に、本研究にとってはコンテキスト・場面の中で使用者が明確で、発話意図が設定された対話文がほぼ均質的に配置されていることが採用の理由となった。各言語約 400 余りの対話文では「機能的場面・シラバス」40 のコミュニケーション・タスクが厳選されており、対話者の人間関係・社会的位置が視覚的にも読み取れ、かつ、一連の対話文の流れに語用論的組み立てが簡潔になされていることが研究上の利点であった。

本研究の視点からは、Halliday (1976) の 3 つの機能要素「発話の場」(Field)、「対人関係」(Tenor)、「様態」(Mode)に加えて第 4 番目の機能要素といえる「問題解決のためのストラテジー」(Strategies)が会話文の流れに読み取れた。シークエンス・ストラテジーには「各言語圏の社会・文化的特質」が深く関わっている。アジア諸言語の学習者は留学先で、初日の買い物で価格交渉をする時からすでにその社会的言語能力を日常的に身に付けていなければならない。

研究グループでは、この TUFSS 言語モジュールのデータベースから発話要素、場面状況、社会的地位、対人役割、男女別、人物像などに関わる項目を発話構成因子として解析し、参照することによりアジア諸語を含む各言語の社会・文化的特質に関する指標の抽出をすることが可能になっている¹¹。

1.4. 社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力対応表の試作

本科学研究グループでは 2016 年から 2017 年にかけて現場で外国語教育（留学生など対象の日本語を含む）にあたっている分担者の協力を得て、CEFR 記述項目再検討のための定性分析を進めた。TUFSS 言語モジュールの中からアジア系個別言語を中心に、日本語・朝鮮語・中国語・ベトナム語・マレーシア語・インドネシア語・カンボジア語・ビルマ語・ベンガル語・ペルシア語・アラビア語などにおいて社会・文化的特徴の濃い場面の会話文を観察し、状況や場面の機能分析から抽出した社会・文化的要素が各自担当の言語にどの程度考慮すべきか、という点について記述式アンケート調査をした¹²。アジア諸語学習者の言語能力の獲得にとって抽出された社会的、文化的慣習が関与的指標かどうか、などの検証がなされた上で、次の段階として社会・文化的特質を考慮した指標を言語ごとに評価し、商業的取引でストラテジーが関与する言語行動「社会関係が反映する文体差、待遇表現・謙遜表現などの言語行動」などのタスクに関してアジア 7 言語による対照表を作成した。ここでは紙数の制約から、この中間段階の評価表に関わる議論の詳細は割愛する¹³。

¹⁰ 東京外国語大学のサイトの <http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/> で公開され外部から利用可能で月間利用者数は 250 万ページビューを超えることもあるという。

¹¹ 富盛伸夫, YI Yeong-il (2017b) を参照。

¹² アジア諸語の社会・文化的特質の指標開発に関するアンケート調査の中間まとめは、科研成果物として本科研のサイトでも閲覧できるようにしている。 <http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/site0008/index.html>

¹³ 詳しくは富盛伸夫, YI Yeong-il (2017b) の「TUFSS 言語モジュールを活用したアジア諸語の社会・文化的特質の指標化」『外国語教育研究』 No.20 を参照されたい。

2. CEFR における「言語能力」の定義と CEFR2018 の新たな視点

2.1. CEFR における「言語能力」の定義

すでに *CEFR2001* では「コミュニケーション言語能力 (communicative language competences)」を明確に定義している。そこでは、言語教育が目標とする言語能力は、複数の能力から構成されていると考えられている。(*CEFR2001*, 2.1.2. : 13 以降) すなわち、

- (1) 言語構造的な能力 (linguistic competences)
- (2) 社会言語能力 (sociolinguistic competences)
- (3) 言語運用能力 (pragmatic competences)

という3つの基本的能力に分類されており、それぞれの能力が重なり合い、また知識と技能とかなる、という。ここで問題とする社会言語能力は、言語の社会・文化的な条件下での言語使用と関連している。

「社会言語能力では、言語使用の社会的次元を取り扱うために必要とされる知識や技量について考察する。言語は社会・文化的な現象であるため、CEFRの内容は、特に社会・文化に係る部分は、その大部分が社会言語能力とも関りを持っている。ここで考察の対象となるのは、言語使用に係る事項に特化しており、これ以外を対象に含めていない。即ち、社会関係の言語マーカー、儀礼慣習、言語使用域の違い、方言やアクセントである。」(*CEFR2001*, 2.1.2. : 13)[下線部は筆者]

「言語は社会・文化的な現象である」という措定から、CEFR の内容で特に社会・文化に係る部分は、その「大部分が社会言語能力とも関り」を持っているという認識は、CEFR 企画者の言語観を反映していると言える。社会・文化の内には、当該社会での慣習(例えば 丁寧さ、世代、性、階級、社会的グループなど、諸々の規範、地域社会でのコミュニケーション機能を果たすための基本的儀礼の言語的定式化)が含まれるが、それぞれの異文化を背負った人同士の言語コミュニケーションに関与しているものの、その際当事者は往々にしてこうした事実に気がつかないものである、と。

また「社会言語能力」は基調概念として、「社会関係」の中で「適切な言語機能」を果たすことが求められる、「適切な言語使用域」を選択できる能力に言及する。ここには、*CEFR2018* で重点領域となる、Sociolinguistic Appropriateness 「社会言語的適切性」の萌芽がみられると言ってよいだろう。

「言語運用能力」とは、言語素材を使うときの機能面に関する能力で、一定のコミュニケーション機能を盛り込む能力、スピーチアクトを含む概念である。これらは談話の語用論、結束性や一貫性とも関わり、テキストのタイプや様式、皮肉、パロディーを判別する能力とも関係しているが、この能力が他の言語的要素にもまして、対話者間の相互作用や、内在する社会・文化的環境から大きな影響を受ける、としている。言語使用者/学習者の能力の中には、「世界に関する知識」と並んで、「社会・文化的知識」「異文化に対する意識」が強調されている。

CEFR2018 では言語能力は「コミュニケーション言語能力」として定義し直され、「社会文化」的能力と「社会言語」能力は包含関係にあると記述されている。つまり、CEFR が「社会言語能力」というとき、「社会文化的能力」という概念をも含意しているのである。

「第一章で CEFR の能力記述文スキームについて述べているように、CEFR では、能力についての見解は、応用言語学のみならず、応用心理学や社会・政治的なアプローチにもまた依拠している。しかしながら、応用言語学の分野では 1980 年代の初頭から様々な能力モデルが展開され、これら

が CEFR に影響を及ぼしてきた。これまで様々なモデルが展開されてきたが、全体的に見て、これらモデルには次の四つの主要な共通点がみられる。即ち、方略的能力、言語構造的な能力、言語運用能力（ディスコース能力と機能的/行動的能力の双方を含める）、社会文化的な能力(社会言語能力も含める)である。方略的能力は、行動との関連のもとで扱いの対象となるため、CEFR では、コミュニケーション言語能力に対する能力記述文の尺度を、第 5.2 項で提示しており、次の三項目の見出しを付けている。「言語構成的」能力、「方略的」能力、「社会言語」能力。これらの側面、即ち記述パラメータは、いずれの言語を使用するにせよ、常に互いに絡み合っており、従って、これらは特定の“構成要素”ではなく、互いに分離することはできない」(CEFR2018 : 130) [下線部は筆者]

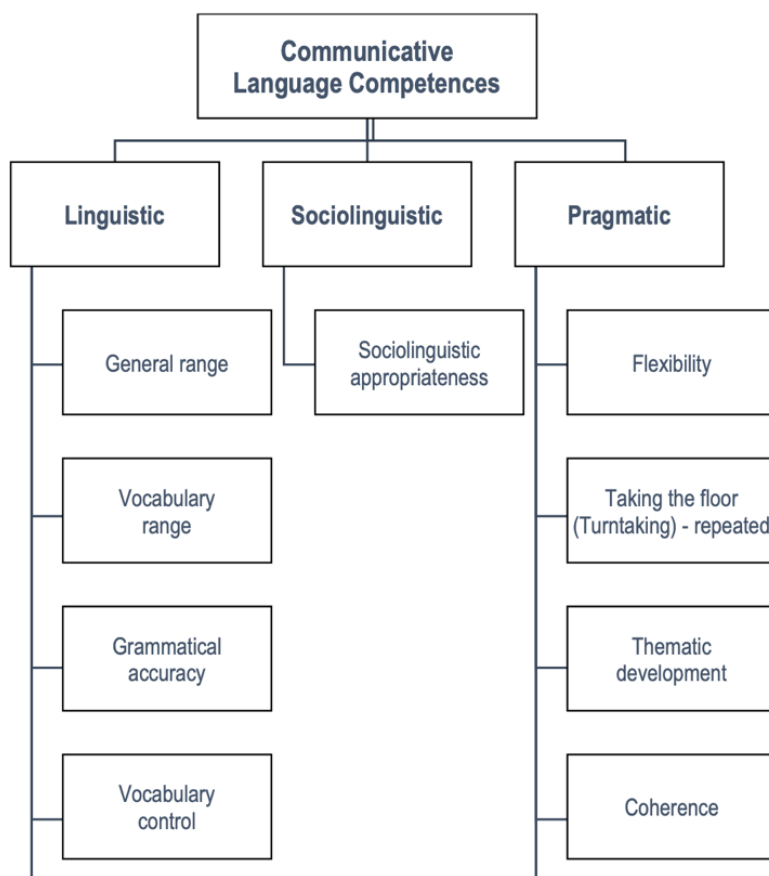


図1 CEFR2018 の「コミュニケーション言語能力」

2.2. CEFR2018 の新たな重点領域

CEFR2018 の改訂では重点化領域として、Mediation というキーワードで表現される「仲介・橋渡しの能力」の育成を核心にすえる。Brian North (2016) は、Linguistic Mediation に加えて、Pedagogic Mediation、Cultural Mediation などを含む円が重なり合う図を示し、「新たな、他者に対して橋をかける (building bridges towards the new, the other)」能力の養成を目標としている。この「他者につなげる、他者とつながる」ことを可能にする社会・文化的対応能力を、CEFR2018 では改訂の柱としており、CEFR2018, 32 ページに示された図 2 の矢印が意味するところは難解だが、RECEPTION 能力と PRODUCTION 能力との相互行為 INTERACTION が交差する先に「仲介(MEDIATION)」能力を設定している。ここでは、特に、

「文化的仲介者」という概念に注目しておきたい。

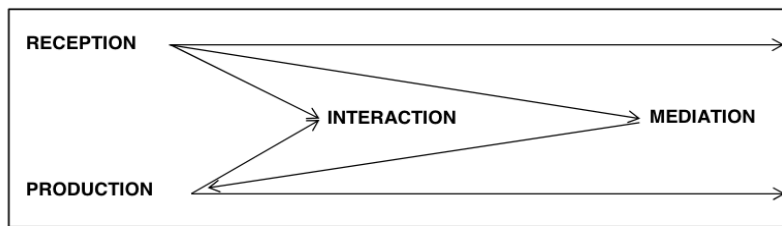


Figure 2 – The relationship between reception, production, interaction and mediation.

図 2 CEFR2018 の「仲介(MEDIATION)」能力

2.3. 「社会言語的適切性」と「文化的適切性」

CEFR2018 の改訂で重要なことは、日本の学習環境とはかなり異なる EU のような（より顕著にはアジア諸国にあるような）複言語・複文化的 (Plurilingual-Pluricultural) 学習環境の中では、いわば規範的な「正誤」の白黒的評価でなく、「適切性 (Appropriateness)」という作業上の概念を用いることである。CEFR2018 : 137 では、「社会言語的適切性 (Sociolinguistic Appropriateness)」を定義し、A1 から C2 までの段階表示を提示している。仮和訳であるが、次ページ表 1 を参照されたい。

表 1 CEFR2018 の「社会言語的適切性 (Sociolinguistic Appropriateness)」評価表[仮和訳]

社会言語的適切性 (Sociolinguistic Appropriateness)		PROSIGN
C2	<p>社会文化と社会言語の両面での差異を考慮に入れ、ターゲット言語の話者と、自身の共同体の話者との間を、効果的かつ自然に仲介することができる。 .</p> <p>意味の含意レベルについての認定を持つうえで、慣用表現や口語表現に十分習熟している。 .</p> <p>ターゲット言語に堪能な話者が使用する言語がどのような社会言語的および社会文化的含意を持っているかについて評価し、これに応じて行動することができる。 .</p> <p>各種様々な高度化言語を、口頭と書面の双方で、効果的に利用して、命令し、議論し、説得し、断念させ、交渉し、諮問することができる。 .</p>	
C1	<p>各種様々な慣用句表現や口語表現を認定し、こうして言語使用域のシフトを評価できるものの、但し、特にアクセントが聞き慣れない場合には、時に応じて仔細を確認する必要がある。 .</p> <p>ユーモア、皮肉、言外の文化的言及を理解し、意味の持つニュアンスを取り出すことができる。スラングや慣用句を相当に使用しているフィルムを見ることができる。 .</p> <p>感情的な利用や、ほのめかし、ジョークなど、言語を柔軟かつ効果的に利用することができる。 .</p> <p>自身の形式レベル（言語使用域およびスタイル）を調整して、公式、非公式または口語などに適宜に合わせることができ、こうして、一貫した口頭言語使用域を維持することができる。 .</p> <p>批判的な意見を述べるか又は、強い不同意を外交的に表明することができる。 .</p>	
	<p>発言の口調が速く、口語的であったとしても、ある程度の努力でグループディスカッションに遅れずについてゆき、これに参加することができる。 .</p> <p>状況に応じて自身を適切に表現するため、社会文化的/社会言語学的手掛かりを認定し、解釈して、自身の言語的表現形態を意識的に修正することができる。 .</p> <p>状況と関係者と共に合わせて、自信を持って、明白かつ礼儀正しく、公式または非公式の言語使用域で自身を表現することができる。 .</p>	

B2	自身の表現を調整して、公式と非公式の言語使用域をある程度区別できるものの、必ずしもこうした区別を適切にはできない。 状況に応じて適切に自己表現し、甚だしい表明ミスを避けることができる。 ターゲット言語の話者に対し、意図することなく面白がらせずとも又はイラつかせずとも、あるいは、他の堪能な話者に対する場合とは別様に振る舞うよう要求せずとも、これら話者との関係を維持することができる。
B1	中性言語使用域内の最も一般的な自身の表現法で自己表現し、広い範囲の言語機能に対応できる。重要な儀礼慣習を意識して、適切に行動する。 当該の共同体で優勢な慣習、使用法、態度、価値、信仰と、自身の共同体で優勢なものとの間の最も有意な差異について意識を持ち、指標を見つけ出す。
A2	情報の交換や要求などの基本的言語機能を実行し、これに応答し、簡単な方法で意見や態度を表明できる。 最も簡単な共通表現法を用い、基本的ルーチンに従い、簡単かつ効果的に社会交流を行うことができる。 日常の礼儀正しい挨拶や振る舞い方を利用して、極めて短い社会的接触で難局を切り抜けることができる。招待、提案、謝罪などを行い、これに応答することができる。
A1	もてなしや別れ方、紹介、「ありがとう」、「どうぞ」、「ごめんなさい」など、最も簡単な日常の礼儀正しい挨拶や別れ方を利用して、基本的な社会的接触を得ることができる。
Pre-A1	能力記述文なし

2.4. 複言語と複文化の能力

CEFR の 1.3、1.4、および 6.1.3 の各項で提示されている複言語と複文化の概念は、この分野で能力記述文を展開するための出発点であった。CEFR と結び付けられた複言語ビジョンでは、個人のレベルでの文化的および言語的な多様性が重要視されている。ここで首唱されていることは、社会的エージェントとしての学習者には、自身のすべての言語的資源と経験とを頼りにして、社会的および文化的なコンテキストの中に全面的に参加し、こうして、相互理解を達成し、知識を獲得し、さらにまた自身の言語的および文化的なレパートリーを展開する必要があることである。CEFR が述べるように、

「複言語アプローチで重要視されていることは、個人の言語経験の文化的コンテキストは、家庭内言語から始まり、広く社会一般の言語へと拡大し、次に他者の言語へと至るため（学校や大学で学習するか、あるいは直接的経験で学習するかにかかわらず）、人々は、こうした言語や文化を厳格に隔離された心的コンパートメントの中に留めおくことをせず、むしろそれぞれか、ある一つのコミュニケーション能力を構築するという事実である。この能力とはすなわち、言語についてのすべての知識と経験が関わりを持ち、諸言語が相互に関係を持ち、相互に作用しあっている能力である。」（CEFR 第 1.3 項）

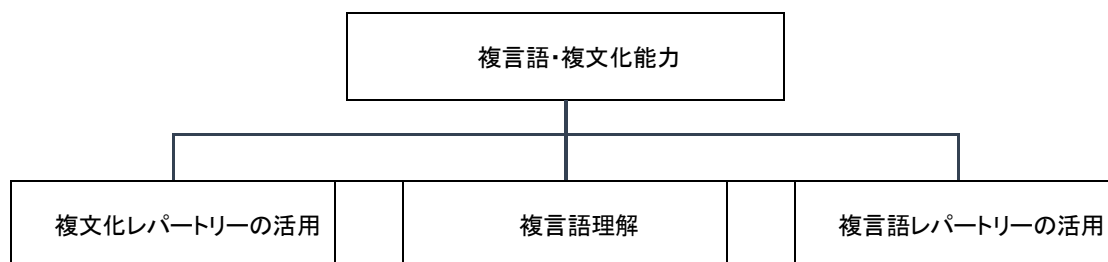


図 3 CEFR2018 の「複言語・複文化能力」

行動指向のアプローチでは学習者は“社会的代理人”として見なされているため、これらの概念と言語教育との関係はさらに先まで押し進められているが、これは次のように考えているからである。すなわち、「言語教育の目的は、大きな変更が加えられている。目的はもはや、単に一つまたは二つの、あるいは三つの言語を習得することとは見なされていないし、各言語は隔離状態に置かれ、“理想的なネイティブスピーカー”が究極モデルとされている。これに代わり、すべての言語能力が一つの居場所を持っているような言語レパートリーを展開することが目的とされている（CEFR 第 1.3 項）。」

能力記述文の策定にあたっては、CEFR の中で言及されている以下の論点が、特に注目された。

- ▶ 特に個人のレベルでは、言語は相互に関係し、相互に連繋し合っている。
- ▶ 言語と文化は、隔離された心的コンパートメントの中に閉じ込められてはいない。
- ▶ 言語の経験と知識はすべて、コミュニケーション能力の構築に寄与している。
- ▶ 様々な言語をバランス良く習得することが目的ではなく、むしろ目的は、社会的コミュニケーション状況に応じて、言語の慣用法を調整できる能力（および意欲）にある。
- ▶ 言語間の障壁はコミュニケーションの中で克服が可能であり、また、様々な言語を目的に合わせて利用して、同じ状況のもとでメッセージを伝達することが可能である。
最近の文献を分析したうえ、その他の概念もまた考慮に入れられた。
- ▶ “他者性”を取り扱い、類似点と相違点を特定し、未知であると既知であることを問わず、すべての文化的特徴を活用し、こうして、コミュニケーションと共同作業を可能とさせることのできる能力。
- ▶ 文化間の仲介者として行動しようとする意欲。
- ▶ 慣れ親しんだ言語を利用して、新しい言語を理解し、類似単語と国際単語を探し出して、未知の言語でテキストに意味付けすることができると積極的能力 — 但しここでは、“偽の友人”の危険性について意識しなければならない。
- ▶ 他の言語の要素および/又は言語の変化を、コミュニケーションの目的に沿い、自身のディスコースの中に組み入れて、社会言語的に適切な方法で対応できる能力。
- ▶ 発話のレベルとディスコースのレベルで、意図的に言語を混ぜ合わせ、埋め込み、交互に使用して、自身の言語レパートリーを活用できる能力。
- ▶ 開かれていること、そして興味津々であることを態度で示し、言語/複言語的および文化/複文化的の意識を拡大できる能力と、その用意のあること。

冒頭で、能力記述文について紹介している項で説明してあるように、ある能力記述文をある個別のレベルに関連付けたとしても、こうした関連付けは、これで排他的とも強制的ともみなしてはならない。能力記述文は、属文書 5 で概要を説明してある検証過程に従って、関連性が最も高い可能性のあるレベルに、教育カリキュラムの目標として、配置されるからである。特殊なレベルの能力記述文であれば、あるいは、下位の利用者/学習者にとっては、達成は困難ではあるものの - 決して不可能ではない - 目標となる場合もあり得ると思われる。特にこれに該当するのは、複言語/複文化の能力記述文の場合で、ここでは、利用者/学習者の経験と専門的知識の範囲、およびこれらの者の複言語/複文化プロフィールが介在してくるからである。この分野の能力記述文を CECR のレベルに関連付ける主な理由は、次の点でカリキュラム開発者や教師を助けるためである。すなわち、a) 言語教育の未来展望をコンテキストの面で拡大させること、b) これらの者の学習者が持つ言語的および文化的な多様性を認め、これを評価すること。各レベルの能力記述文を用意することの目的は、関連する複言語/複文化的目標を選択しやすくさせ、こうして、当該の利用者/学習者の言語レベルとの関係からみても、これら目標を現実的なものに

させることにある。

複言語空間の助長の尺度は、本項ではなく、“コミュニケーションの仲介”の章に含めてあるが、その理由は、この尺度の論点は、文化間仲介者としてのプロアクティブな役割に置かれているからである。本項の三つの尺度は、複言語および文化間教育に係る幅広い概念領域が持つ側面について記述している。

この分野が、**FREPA** (Framework of Reference for Pluralistic Approaches)の主題である。FREPA では、言語レベルからは独立したハイパーテキスト構成で、複言語と文化間の能力が持つ側面をリストにまとめてあり、次の三つの広い分野に応じた編成を行っている。すなわち、知識 (savoir)、態度 (savoir-etre)、技量 (savoir-faire) の三分野である。利用者は、CARAP に問い合わせ、さらに詳細な見解や、この分野での関連の訓練資材を手に入れることができる。

2.5. 複文化レパートリーの活用

多数の概念や、文化間能力についての能力記述文を、以下に例示する。

- ▶ 文化的多様性、反応の調整、言語の変更などに直面した際、曖昧さを処理する必要性。
- ▶ 様々な文化は様々な慣行や規範を有する可能性のあること、そして他の文化に属する人々は、行動を様々な感知する可能性のあることを理解する必要性
- ▶ 行動の差異を考慮に入れる必要性（ジェスチャー、口調、態度など）や、オーバージェネレーション (over-generation) やステレオタイプについて議論する必要性。
- ▶ 類似性を認定し、コミュニケーションの改善のための基礎としてこれを利用することの必要性。
- ▶ 差異に理解のあることを示そうとする意志。;
- ▶ 常に釈明を行い、これを求める用意のあること、誤解のリスクの可能性を予測すること。
この尺度で実際に設定されている基調概念は、以下である。
- ▶ 文化的、社会・言語運用的、社会・言語的な慣習/指標を認定し、これらに基づいて行動する。;
- ▶ 将来見通し、慣習、事象の類似点と差異とを認定し、解釈すること。;
- ▶ 中立的および批判的に評価をすること。

尺度は、下位から上位へと次のように移行する。レベル A では、利用者/学習者は、根底に文化を抱えたコミュニケーション問題の潜在的原因を認定し、簡単な日常の意見交換だけで、適切に行動することができる。B1 のレベルでは、自身は一般に、最も広く一般に使用されている文化的指標に対処することができ、社会・言語運用慣習に従って行動し、自身の文化または他の文化の機能について説明するか、あるいは議論することができる。B2 のレベルでは、利用者/学習者は、効果的にコミュニケーションに加わり、出現する最難関の問題に対処することができ、通常は、誤解を認め、これを修復することができる。C のレベルの対象となる能力は、如才なくテキストを説明できる能力、信仰の持つ特殊な側面について解釈し、討論できる能力、社会言語的および能力運用的な曖昧さを管理できる能力、建設的かつ文化的に適切に対応できる能力であるさらに *CEFR2018*: 156～157 には、「文化的適切性」の概念を基本にした複言語・複文化コミュニケーション能力の測定に関わる能力評価項目が詳しく解説されている。下の表 2 を参照されたい。

表2 CEFR2018の「複文化レパトリーの活用」評価表[仮和訳]

複文化レパトリーの活用	
<p>注意:アスタリスク(**)の付いた能力記述文は、B2についてハイレベルであることを表す。これらは、レベルCにも該当する場合もある。</p>	
C2	<p>コンテキストに従い自身の行動や自己表現の口火を切り、これらを制御できるとともに、文化的差異を意識し、緻密な調整を行ったうえで、誤解や文化的偶発事を防止および/又は修復することができる。</p>
C1	<p>社会言語/能力運用慣習の違いを特定し、これらについて批判的に考察し、こうした作業に応じて、自身のコミュニケーションを調節することができる。</p> <p>知的な出会い、読書、映画などから着想を得て、背景を手抜きなく説明して、文化的価値や慣習の持つ特定の側面について解釈し、議論することができる。</p> <p>自身の共同体の、および自身が慣れ親しんでいる共同体の文化的前提、予断、ステレオタイプ、偏見などについて自身がどのように解釈しているかを説明することができる。</p> <p>文化横断的コミュニケーションの中に見られる曖昧さについて論じ、建設的かつ文化的に適切は方法でこれに対応し、こうして、明快なコミュニケーションを確保することができる。</p> <p>**しばしば判断や偏見の根拠となっている暗黙の価値観を考慮に入れたうえで、自身の社会集団や他の社会集団が持つ物の見方と慣習を記述し、評価することができる。</p> <p>**他の文化の文書または事例を解釈し、説明して、自身の文化の文書または事例との関係、あるいは自身が慣れ親しんでいる文化の文書または事例との関係を明らかにするか、あるいはこの双方の関係を明らかにすることができる。</p>
B2	<p>自身の共同体や他の共同体に関し、メディアで発表された情報や意見の客観性とバランスについて議論することができる。</p> <p>文化的に決定される行動様式（ジェスチャーや声量）の類似性と相違性を特定し、これらについて考察し、これらが持つ意義について議論し、こうして、意見の一致点を見つけることができる。</p> <p>特定の状況下で通常人々が当然と思っていることが、必ずしも他の人々には共有されていないことを、相互文化的な出会いの中で認定することができ、これに応じた行動や自己表現を行うことができる。</p> <p>一般に、任意の文化の文化的指標を正しく解釈することができる。</p> <p>自身の文化や他の文化の特殊なコミュニケーション方法と、これら文化が生み出す誤解のリスクについて、考察し、説明することができる。</p>
B1	<p>一般に、姿勢、アイコンタクト、人と人との間の距離感などに係る慣習に従って、行動することができる。</p> <p>一般に、最も広く一般に使用されている文化的指標に、適切に応答することができる。</p> <p>自身の文化の持つ機能を他の文化の構成員に説明するか、または他の文化の持つ機能を自身の文化の構成員に説明することができる。</p> <p>文化的に決定される自身の行動が、自身の文化とは別の文化の構成員によって、どのようにして別様に感知される可能性があるかについて、簡単な言葉で説明することができる。</p> <p>他の社会文化的コンテキストでは自身にとって“不思議”と思える事であっても、当該の他の人々にとっては“通常”と思える場合が十分にあり得ることを、簡単な言葉で、議論することができる。</p> <p>自身の文化的決定行動が、他の文化の人々には別様に知覚される場合のあり得ることを、簡単な言葉で議論することができる。</p>

A2	<p>日常の社会的交流（様々な挨拶儀式など）に関連した基本的な文化的慣習を認定し、これを適用することができる。</p> <p>ルーチンからの逸脱に対処するのは困難ではあるものの、日常の挨拶、別れの言葉、感謝や謝罪の表明などでは適切に行動することができる。</p> <p>日常の言葉のやり取りでの自身の振る舞いが、自身の意図とは違ったメッセージを伝達する可能性のあることを認定し、これについての簡単な説明を試みることができる。</p> <p>他の文化の構成員との間で言葉のやり取り上の問題が生じた際に、こうした状況でいかに振る舞うべきか確信が持てない場合であっても、こうした問題を認定することができる。</p>
A1	<p>たとえ、それらを、簡単で具体的な日常的取り引きに適用するのは困難であるとしても、数量の計算、距離の測定、時刻の通知などには様々な方法のあることを認定することができる。</p>
Pre-A1	<p>能力記述なし</p>

2.6. ポライトネス研究の視点からの「社会・文化的適切性」概念の再検討

「社会・文化的適切性」の概念を言語教育に取り込む場合、近年言語研究で注目されている「ポライトネス」の枠組みが学習の初期段階から有用であると考えられる。CEFR2001では、言語運用能力（Savoir faire）の育成に必須と思われるポライトネス概念には不思議なほど表面的にしか触れられていない。CEFR2001の5.2.2.2章で各文化によって異なる「礼儀上の慣習」をあげて、これは特に礼儀的な表現が文字通りに解釈されたときには異文化間で誤解を起こす原因となることが非常に多い、と説明し、「ポジティブ・ポライトネス」として贈り物、将来の優遇の約束、歓待などをあげている。また「ネガティブ・ポライトネス」としては、「回避的・消極的な」礼儀、例えば、独断や直接的な命令など相手の面子を潰すような行為を避けたり、謝罪やあいまいな言い方を使うこと、などに言及しているものの、これがどのような場合にどのように機能するか、については十分には論じていない。

さて、一般に言語学で「ポライトネス理論」として総称される言語行動の説明原理は、コミュニケーションにおいてお互いの人間関係をより円滑にする、効果的なコミュニケーションを行うためのストラテジーであり、これには敬意表現や丁寧表現を含んだ「普遍的な概念」が基本にあるとされる¹⁴。これを本研究の視点で次のように簡略化してみよう。まず、Face Threatening Act（相手の面子を脅かす行為：以下、FAT）には3要素があるとし、その好意の強さの度合は次の式で表される：

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

W_x: 相手の面子 (Face) を脅かす度合い (Weightiness)

D: 話し手と聞き手の社会的距離 (Distance)

P: 聞き手が有している話し手に対する社会的力 (Power)

R_x: ある文化の中における相手にかかる負担度 (Rank of imposition)

つまり、相手の面子 (Face) を脅かす強さ FTA は、話し手 (S) と聞き手 (H) の社会的な距離 D と、話し手にとって相手がどの程度の社会的な力 P (タテの人間関係) を持った人であるか、さらに、相手にかかると予想される負荷の度合い R という3因子の和とされる。ただし、社会的・心理的「距離 D」(ヨコの人間関係) の操作：社会的な距離は、家族や親族、また友人・知人関係、あるいは初対面の相手という社会的な関係にある、一種の心理的・情意的な距離感あるいは隔たり感といえるもので、数値化しにくい。アジア諸地域の多くでは、距離を縮めようとする働き (ポジティブ・ポライトネス) を強

¹⁴ Brown, P. & S. C. Levinson (1987)や滝浦真人(2008)などを参照されたい。

めるのに、親族でない相手に親族名称を言語形式として用いて、機能的には人称詞や呼称とすることで親しい間柄を表現しようとする。(日本語の「おじさん!」「おねえさん!」という親族ではない他人への呼びかけはその一例。)逆に、日本語の敬称の多くは社会的・心理的に一定の距離を確保しようとする働き(ネガティブ・ポライトネス)があるとされる。他方で、西洋語には目の前の対話者に本来は三人称の代名詞で呼びかけて敬称二人称とするいわゆる T/V 代名詞の転用をする言語も多い。語彙としての親族名称を人称詞や呼称に用いて機能的転用をすることで生成される「距離」感、話し手によって認識された親疎関係を空間的「遠近」の次元で読み替える一種の比喩法による記号論的操作と言える。

社会的「力関係 P」(タテの人間関係)の操作:聞き手が有している話し手に対する社会的力を比喩的に上下関係と捉え、自他の社会的立場を言語的に定位させ、そこから転化しようとする記号論的操作である。対話者に対しその社会的役割の呼称を用いて立場の差を意識化させ、機能として敬意を強めるプラス(つまりポジティブ)の働きと、力関係の強弱を希薄化して対立を避けようとするマイナス(つまりネガティブ)に向かう操作がある。日本語では年齢差を顕にする表現や職業名の使用により上下関係を意識させる強い要因となるが、反面、対話者の本来の属性とは異なる職名をあえて使うことで垂直的な上下関係より水平的な親しみや皮肉を含意することもある。(「...先生」「社長さん!」などの例)

対話者にかかる「負荷の度合い R」の操作:特に語用論的に依頼や断り、謝罪などのタスクで、トピックにしている事柄の重さ、深刻さなどの判断は、外国語学習者には極めて難しい問題であろう。なぜならば、それは特定社会の観念・価値観が深く関わっており「文化的依存度」が高いからである。例えば、私物の貸し借りの判断や、旅行に行く友人に何をどれだけ買ってきてくれと依頼できるかなど、負担感に関わる社会通念はアジア諸語地域にも違いが大きい。異文化間言語コミュニケーション能力の育成は、社会・文化的依存性が高いだけに説明原理としてのポライトネス理論が援用できると考える。

学習対象言語がもつ社会・文化的背景の知識はまず学び取ることが必要であるが、その先には、知識を適切に運用して円滑なコミュニケーションができ、さらにはより良い人間関係を築き保つことが望ましい。社会・文化的適切性の尺度を参照しつつ言語教育の範囲に言語形式の適切な運用を含める試みをするには、このポライトネスの枠組みを利用しつつ、語用論的な関与因子が連動して働くメカニズムの説明が学習者に有用であると考えられる。ただし言語一般の「普遍性」を主張するポライトネス理論を援用するにあたっては、むしろ各言語・文化の特質をふまえる前提に留意すべきであろう。

3. アジア諸語教育における「社会・文化的適切性」に関する研究(2019年度まで)

中間報告書作成の準備にあたって科研代表の富盛伸夫は統括班会議での議論を経て、研究課題の統一的主题を「社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法:アジア諸語版」と仮に定め、2019年11月4日付けで科研分担者と協力者に参加を呼びかけた。その第一の成果が、自由寄稿の形で募集された研究論文等で、本報告書で第二部に所収されている。第二の共同作業が、先立つ約一年間の準備期間を経てマニュアルが用意された、MS Office のエクセル表「~語の社会・文化的コミュニケーション能力評価表」の作成であったが、本報告書では本稿の最後にまとめて掲載している。第三の共同作業はアジア諸語教育の担当者に依頼したアンケートへの回答である。以下に、その概要と質問項目と回答のまとめを紹介する。

これに先立ち、2019年10月4日に開催した第7回研究会で行った「アジア諸語の社会・文化的特質とCEFRアジア版作成の試み」と題した共同プレゼンテーションで、統括班メンバーがタイ語、ビルマ語、カンボジア語、韓国語について準備作業の中間報告を発表した。ここで参会者に紹介されたのが「社会・文化的コミュニケーション能力評価表」で、各言語の社会・文化的特質をふまえたCEFR対応表の形で6段階の能力別項目一覧を提示している。

3.1. アジア諸語版「社会・文化的コミュニケーション能力評価表」の作成

標記の共同作業に参加を特にお願いしたのは、研究分担者のうちアジア諸語の個別言語教育の担当者であった。サンプル言語として、上記の第7回研究会で公開された4言語（タイ語、ビルマ語、カンボジア語、韓国語）の試案が添付ファイルで配布され、自分の担当する言語について社会・文化的コミュニケーション能力評価表の項目を考え特性を配慮して段階ごとに定義し表を作成することが要請された。

他に文献として、CEFR 関係の原資料の仮和訳が参照できるように配慮した。（次節参照）

本稿の末尾に調査対象となった9言語の表が添付されているので詳しくはそれらを御覧いただきたい。（表の中のカラム欄の配置やフォントに揺れがあるが、あえて統一を要請していない）

以下にカラム欄で使用した用語について簡単に説明しておこう。

「**言語行動のタスク**」は、TUFS 言語モジュールで使用されている機能シラバスを整理し関与的と考えられるもののみ抽出した社会・文化的指標を、それぞれの言語・社会・文化的に特に言語行動に多く観察されると作成者が判断したものを機能タスクとして設定してある。

「**社会・文化的方略**」は、語用論的視点から各言語・文化に一般的に使用されている談話的・語用論的ストラテジーを抽出して機能タスクとして設定した。

「**CEFR の目安**」または「**CEFR 難易度**」という見出しのカラムで、CEFR 対応の6段階に機能タスクが割り振られているが、通言語的に絶対的に一定したレベルを設定しているのではなく、むしろここでは、学習者に相対的に感じられる測定目安・目盛りのなスケールである。

「**能力を判断する手がかり(Descriptors)**」はいわゆる Can-Do 的な記述子のことで、EU で提案されている記述項目よりは具体的に社会・文化的な文脈やパラメータを使って説明していることが特徴的である。

「**～語の社会・文化的特質の補足的説明(Supplements)**」はこの科研で提案している特記事項で、各言語の社会・文化的特質をふまえた、Descriptors を適用して能力段階を判断する上で考慮すべき事柄が具体的に付記されている。本科研課題の重点項目である。

3.2. 「社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法：アジア諸語版」アンケート

科研分担者であり、かつアジア諸語の言語担当者には上記の社会・文化的コミュニケーション能力評価表作成の依頼と同じ2019年11月4日付けでアンケート調査がメール配信され、表を作成した際の工夫した点、苦勞した点、表自体の問題点、CEFR とご担当言語との適合性の諸問題などについて、以下の質問票が配布された。回答にあたっては、できるだけ具体的な教育現場などからの経験を踏まえて他言語・他文化の読者にもわかりやすく書いてもらえるように依頼した。ただし、代表者の富盛がアンケートへの回答を全体的にまとめ直す際には、必要に応じ言語名は明記するが匿名にするという留保条件で、アジア諸語教育へのCEFR受容に関する問題点を本稿に総論的に記述する旨を明記しておいた¹⁵。

3.2.1. アンケートの概要

上記アンケート調査は記述式で、9項目の質問に分量自由に回答し返信してもらおう形式をとった。このアンケート調査にも参照文献として、

【CEFR2001からの抜粋資料】「CEFR2001年版からの抜粋（社会・文化的要素に関わる部分）」

【CEFR2018 Companion Volumeからの抜粋資料】「CEFR 2018 Companion Volume_

¹⁵ このアンケート調査に協力してくださったアジア諸語担当の研究分担者と研究協力者については、ここでは氏名は記さないが公式HPには掲載されているので参照されたい。ここに深く感謝の意を表します。

社会・文化的適切性_仮和訳_科研作業用」

を添付しておいた。

以下、項目を列挙する。

- (1) 「社会・文化的コミュニケーション能力評価表をご自分の担当言語で試作したときの、戸惑いや疑問点、工夫した点、などを、具体的に、かつ自由に書いてください。」
- (2) 「担当言語の教育現場では、どのような社会・文化的な側面に配慮し、重視していますか？あるいは、あまり問題にいませんか？具体的例や理由を添えて書いてください。」
- (3) 「担当言語の教育に関して、固有の社会・文化的特質について、特に難しいと感じる事柄を書いてください。学習者を日本語ネイティブとして記述して結構です。日本語教育の場合は、外国語ネイティブ学習者、となります。」
- (4) 「担当言語の教育プロセスで社会・文化的要素に関わる場合、どのような教材開発や教室運営、あるいはカリキュラム設計などによって工夫をしていますか？」
- (5) 「担当言語で社会・文化的要素が深く関わる言語構造・文法組織などがあれば、具体的に書いてください。」
- (6) 「CEFR 研究の展開のひとつとして社会・文化的側面を配慮した能力評価方法を導入することの必要性(または是非について)書いてください。」
- (7) 「特に、社会・文化的コミュニケーション能力評価に関して、CEFR のレベル分けや段階評価についての利点・弱点(短所など)を書いてください。」(参照資料は上に同じ)
- (8) 「『社会言語的適切性』は CEFR2018 年版で強調されている部分ですが、それについて、ご提案・ご意見があればご書いてください。」
- (9) その他、ご意見があればご自由に書いてください。

3.2.2. アンケートへの回答から読み取れたものと残された課題

以下、本稿では主題に即した主な項目のみを、順不同でとりあげて回答例から総括する。(基本的には本稿の執筆者がパラフレーズして編集し、かつ私見を交えてまとめているので、元の回答者の氏名公開は控えておく。ただし重要で具体的な事案については、部分的に『』でほぼ直接引用している箇所もある。この点は回答者のご理解をいただきたい。)

- (1) 「社会・文化的コミュニケーション能力評価表をご自分の担当言語で試作したときの、戸惑いや疑問点、工夫した点、などを、具体的に、かつ自由に書いてください。」

「社会・文化的コミュニケーション能力」をどのように捉えるか

学習言語の「社会・文化的コミュニケーション能力」とは抽象的すぎて、社会・文化的なコミュニケーションとそれ以外の区別がよく分からない、と戸惑う回答者が複数いた。『言語活動に随伴することのどこまでが文化的レパートリーなのか、という疑問を持ち続けながら作成していた』、という。どのようなことが社会・文化的なことなのか、その基準が曖昧ではないか、という戸惑いがみられたのは、概念自体が社会的と文化的と未分化の場合があるし、CEFR 自体も明確には分けて定義していないことによる。本稿でも、未熟な定義をあえて避けていることは率直に言わねばならない。

社会・文化的コミュニケーションは人間関係や文脈によってやり取りの仕方が幾通りもあり、何を標準とするか、どこまで考慮すべきかという点は最後まで残る。しかし、時として、語法的には問題がなくともコミュニケーション上は重大な失敗を犯す場合があるし、その理由が言語能力にはないことが察せられることも多い。言語能力には帰せられない誤解やミス・コミュニケーション、人間関係の失敗な

どの原因を精査すると、おのずと社会・文化的要因が関与していることが確認できるだろう。

もちろん、回答者自身がネイティブでないことがこの作業の大きな難しさにつながることは避けられないし、過大な依頼であったことも事実である。『母語話者と全く同じようには話せないの、本表はどこを目指すのか、理想を書くのか、現実性を重視するのか、の戸惑いがあり、...自分にとっては長年の居住経験や教育経験がないにもかかわらず、その国の社会や文化を勘案する表に対して、単なる個人的な経験や感覚で表を作成してよいのか、躊躇する』ところがあったようである。語学教育者からの視点と学習者からの視点、あるいはネーティブと非ネーティブではレベル分けや段階評価が異なるものがあるかもしれない。こうした中で、ネイティブを協力者に頼んで回答し、表の作成に携わってくださった先生もあり企画者としては感謝にたえない。

6 段階の能力レベル

CEFR 的な 6 段階の能力レベルの判断が一番難しかったようである。「能力を判断する手がかり」は「これができる」という Can-Do 的な観点で記述するように割り切ってしまう人と、適切性の連続体を強く感じて、あくまでも目安であり、6 ではなく 3 段階程度に振り分けるのが良識的にはせいぜいの努力であったと述懐する先生もいる。

一応の判断基準は、CEFR2018 に掲載されている社会言語的能力の評価測定やレベルの目安という観点をもとに、『A1 が最低限自分のことが言える、A2 が相手の言うことが聞けて 1 回のダイアログができる、B1 は中立的な立場で日常生活に必要な表現が普通に無難に言える、B2 は相手や状況によって適切で円滑なコミュニケーションができる、C1 は B2 よりもさらに慣習や礼儀作法に配慮した表現、やりとりができる、C2 は情報上、余計なことも上手に言える、仲介・橋渡し・他人への干渉ができる、という基準にした。』という設定にして処理している言語もある。

A1 から C2 までのレベル付けが、社会・文化的側面に関わり難しさが生じるケースも指摘された。日本語教育では、『例えば、日本社会のウチ・ソトの概念を A1 で掴むのは難しいですが、語彙レベルで「私の父」「山田さんのお父さん」は導入しているし、A2 レベルで「私は父に時計をもらいました」「山田さんのお母さんにいただきました」「ホームステイのお母さんが浴衣を着せてくれました」などを運用することは学習次第では可能となる。しかし、文体差、つまり敬語やくださった表現を自由に使えるレベルとすると、B2 あたりになるかなと判断される』、という。

このレベル分けの課題を前にしたときに、まずは自己評価をする一学習者としての自分の能力について内省をする。しかし語学教師である我々は、教師としての立場が意識の全面に出て、レベル分けをして学習者の能力評価にどのように使えるのかを考える性癖を持ってしまっている。このように各項目の CEFR のレベル設定を判断する際、どうしても教育の観点から考える視点になってしまうようである。レベル分けの基準について、『現在のカリキュラムの中でいつ教えるべきかで判断するか（多くの学生が到達していると判断される時期に合わせて、1 年生は A1 と A2、2 年生は B1 と B2、3 年以上で 2 年生以後にも力を伸ばしている人は C1、3 年以上で特に優れている人は C2 と想定し記述）、あるいは、語彙文法のレベルと別途に社会文化的能力のレベルを分けて判断するべきかという迷い』もある。

言語行動のタスクと社会・文化的方略

言語行動のタスクの選定が恣意的になってしまうのではないかと、との心配があった回答者が複数いた。本研究では TUFS モジュールや既存の教材で取り上げているタスクを参照することから出発したが、課題としては、今後、談話分析や社会言語学の成果を徹底的に調査し、項目の追加、修正、調整などを行う必要があるととの提案があった。

『タスクは1つの欄に1つとするか、同じ項目（言語行動のタスク）でも異なるレベル設定をすることがあり戸惑う場合がある。しかし、言語形式や文体、敬語法など異なるレベルにあるので、複数に出現させてよいだろう。同じタスクでもレベルが上がるにつれ遂行内容が変わることを想定し、異なるレベルに設けると現実的であろう。例えば、定型句を使う挨拶はA1、定型句を使わない挨拶はA2にするなど。相手とのやり取りがタスクの僅かな違いが出る設定もできる。例えば、「依頼・勧誘・提案をする」、「依頼・勧誘・提案に対する意思表示をする」に分けるなど。また「依頼・勧誘・提案に対する意思表示をする」の項目に対しては、「受け入れる」と「断る」とに分け語用論的なシーケンスの展開も重要な要素となるだろう。社会文化的方略に重なる部分である。』

特記すべきは、相手の呼称選択をどのレベルに置くかについて、各レベルにそれぞれあるため、非常に難しいことである。人称詞・呼称の学習はA1からはじまるが、ベトナム語、ビルマ語、タイ語などの担当者から指摘があったが、アジア諸地域で最も難しい学習事項のひとつであると言えるだろう。ベトナム語学習において、「挨拶をする」というタスクが問題にならないEU諸語に比して、『初学者にとって圧倒的に難しいのは人称詞である。多くの学生にとって英語のyouやIに当たる一語が(実質的に)存在しないベトナム語では「こんにちは」に相当する挨拶がもう難しい。これは本学のベトナム語学習者の半数を占める日本語ネイティブのみならず、国際学生(留学生)にとっても同様である。人称詞の適切な指導を心がけてこまめに直せば(特に入門期にある)学習者の意欲を殺ぎかねないし、誤用に寛容な姿勢を示せばネイティブ学生から「ベトナム人はそう言わない」との指摘を受け、それは結果として学習者と教員の信頼関係醸成を妨げることになる。このあたりのさじ加減が難しい。』という具体例を拝見すると、言語行動のタスクは社会・文化圏によって難易度が非常に異なり、別のCEFR対応表を作る必要を感じさせる。

タイ語教育での具体的な方策としては、『人称詞・呼称に複雑な機能付与があるタイ語では、特有の社会文化的特徴として、(1)相手との位置関係の確認、(2)距離の操作、(3)人間関係を保つための配慮、(4)相手に負担をかける場合はたらきかけ、(5)文体の操作、を評価項目に織り込み、語用論やポライトネスの視点を交えてタスクレベル分けを行うなど、各レベルに応じてタイ語特有の社会文化的特徴を活用できる。』と工夫している。

CEFR2018の社会言語的適切性に関する提案の内容は、『B1～C2の内容が極めて抽象的で、個別的な言語行動タスクへの落とし込みが難しく、差別化し難い作りになっている』との不満があった。概してCEFRの記述項目は各個言語の特殊性に関わらないようにする配慮からか、表現が抽象的すぎる嫌いはある。(本稿の他の項目も参照されたい。)

アジア諸語では日本語を典型とするように、ポジティブポライトネスよりもネガティブポライトネスのほうが優先されるディスコースが多い。例えば、日本語教育からのコメントを引用すると、『「断り表現」では、相手に詫びの多用や相手の領域に踏み込まないように、「明日飲み会があるんだけど、どう？来れなさそう？」といった断りやすい表現形式を選択したりする傾向がある。日本語教育では親しくなる、くだけた表現よりも「です・ます体」を初級の間は勉強し、B1あたりから、目上の人に対する言い方と親しい関係のものに対する言い方との使い分けの練習をする。B1、B2あたりでは依頼、誘い、詫び、断り、約束などの機能会話場面で依頼の負担度の違い、相手との関係・距離の違いによる会話の進め方を練習するが、重要なのは、日本語ではストレートに親しくなろうとすることよりも、相手に失礼にならないことを優先して教えているようである。』

社会・文化的方略として、話題・トピックの選択も重要な要素となる。一般的な会話として相手の専門や趣味、出身地を聞いて、それについてより詳しく聞き合ったりする、一種のphaticな雑談会話があるので、社会・文化的方略の範囲では適切な話題選択というタスクとなろう。

(6)「CEFR 研究の展開のひとつとして社会・文化的側面を配慮した能力評価方法を導入することの必要性(または是非について)書いてください。」

社会・文化的側面を配慮した能力評価方法は必要かもしれないが、、、、

社会・文化的側面とはほぼ無関係な言語運用能力もちろんあるが、アジア諸地域では社会・文化的に適切な言語行動を言語運用能力から明確に切り分けることは不可能であるようだ。CEFR で社会・文化的要素を考慮していることは高く評価できるが、宗教・慣習の違いが言語学習の中に反映できていないのが現実である。出発点として CEFR の方法を利用することは現実的かもしれないが、『必ずターゲット言語と学習者母語の社会・文化的特徴を考慮した修正が行われるべきだ』という意見があった。ただ、言語教育の中に取り込む内容として学習言語の背景にある文化や社会の特質を知って、言語が運用できるようになることは大切だが、CEFR への導入の必要性については判断できない、あるいは、必要だとは思いますが、最優先事項ではない、とする回答が複数あった。

「多文化共生社会」のなかで変容する語学教育

日本を例にあげると、外国からインバウンド効果で大量の非母語話者が入って来る。特に地方都市では、若手の外国人材が必要で、外国人材の方でも日本で職を得て永住希望者も増えてきている。まさに「多文化共生社会」を迎える日本に、CEFR のような複文化主義は重要な概念になると思われる。

日本語教育の立場からのコメントを紹介する。『日本の社会・文化的特徴を言語教育に取り入れることと同時に、「やさしい日本語」運動のように、役所の日本語文書をもっとわかりやすくするとか、担当者がわかりやすい日本語表現を使って対応できる能力を身につけるような研修が必要だと言われている。このような社会的変化を受けて今年 6 月に「日本語教育推進法」が国会で法案が成立したこともあり、様々な機関で日本語教育の需要が高まっている。それに伴って、「アカデミック日本語 Can-do リスト」「ビジネス日本語 Can-do リスト」「介護の日本語 Can-do リスト」「外国にルーツのある児童生徒のための Can-do リスト」など目的やニーズに応じた Can-do リストが開発されている。そして、そのなかには、日本の社会習慣や価値観、行動原理からする言語コミュニケーションのあり方が反映するはずである。』

多様な外国人材のもつネイティブの文化様式と日本のそれとのギャップの仲介行為 Mediation は日本語教育の中心のひとつになるに違いない、との印象を強くした。

東南アジア諸国での複言語・複文化社会化

日本に遅ればせながら起こっている状況は、すでに長い間、東南アジア諸国では複合的な社会への動きが顕著である。東南アジア地域では『ASEAN 経済統合体の発足により、ASEAN 域内での人の活発な交流による複合社会化により、近年「外国語教育としての～語教育」の重要性が高まっており、自国語教育の延長ではなく、「外国語としての～語教育」のスタンダード化の必要性が教育関係機関や当事者で認識し始められている。』という背景があるようである。

岡野・ライン・富盛らのミャンマーでの CEFR 受容の調査の結果から、ほとんどの言語教育のスタンダード化自体の必要性は認識されているもののその中への社会・文化的側面の重点化の議論には及んでいない。CEFR という評価方法の活用も研究されていない国も多いのが現状である。それはそれで事実として捉えて良いが、CEFR の構想のなかにある「複言語・複文化」社会への対応という理念は、言語能力評価法以前にも研究され導入されてもよいのではないかと考える。

タイ語のケースをあげると、『ASEAN の統合進展により域内での人的交流も活性化し、タイでの複言語・複文化社会化が加速している。物理的には距離が近いために、域内の他言語圏の人の思考や行動様

式も類似しているものと考えられがちであるが、域内の近い言語圏同士だからこそ、特に社会・文化的要素の違いに気付かない点も多い』、ということである。CEFR のような各国語の能力評価の中に、各言語特有の社会・文化的要素の特徴を織り込むことで学習者に異文化間の違いに関する意識を促す契機が作れるのではないかと期待し、社会・文化的側面を配慮した能力評価方法が必要であると考えている、という肯定的な回答があった。

「使える言語能力」には社会・文化的能力も必要

次に少し長いが、ある回答者からの直言を引用してご判断に任せる。

『ひと昔前に「使える」「使えない」という、ある種の判断基準が外国語教育の現場に響いていた。この評価なり判断が面白かったのは、教える側が学習者を評価するのではなく、学習者が自らにとって学習内容が実用的であったかどうか（あるいは実用的に教えることができる教師か否かを）を評価していることであった。「習ったことが使えるかどうか」「実際に通じるかどうか」を学習者が評価し、「使える」「使えない」の判断を与えていたのだ。表現がいささかポップなこともあり、まじめに検討されることは少なかったと思うが、コミュニケーション言語能力のうち、言語構造的能力に重点化しすぎた授業への批判と捉えることが可能ではないか、と考えている。本来は不可分である社会言語的能力、語用論的能力が、いわば脱色・脱臭された形の文法ドリル、パターン・プラクティスが主流にあった時代である。

当時、たとえ英語にしても、実際に（英語で）やり取りをする場面は限定的だったし、まして教授頻度の低い言語であれば、現地留学でもしない限り、母語話者と出会うことも難しかった。だから、外国語の学習とはその言語の構造を理解すること、という「常識」が生まれ、それが外国語教育において支配的な地位にあったのだろう。たまたま、学習した言語を実際に使ってコミュニケーションする機会を得た幸運な学習者が、（不幸にも）学習内容が「使えない」ことに気が付く、皮肉な時代だったのではないか。

自分が教える側に立って初めて気が付いたが、社会言語的能力や語用論的能力はかなり長期間にわたって当該言語を使う環境で生活してみて（少なくとも他人に教えることができる水準まで）ようやく身につく。比べることに意味も意義もないだろうが、教科書的な正しさ、いわゆる規範をきちんと教えることと同じ程度に、この時代において社会・文化的な言語能力を教えることの大切さはもっと強調されてもいいのではないか。社会言語的能力を涵養することができる教師はより高く評価されることが適切なのではないかと思う。』

(7) 「特に、社会・文化的コミュニケーション能力評価に関して、CEFR のレベル分けや段階評価についての利点・弱点(短所など)を書いてください。」

社会・文化的コミュニケーション能力評価と CEFR の段階評価

語学教材作成の経験者からのコメントを紹介する。『かなり具体的なレベル分けがあり、特に上級者向けのコースを設計するときには役立つだろう。他方で、学習者全体の圧倒的多数を占める入門期の学習者、初級学習者（語学書のバラエティを考えればご納得いただけるが、一般に入門・初級レベルほど語学書は多く出版されている、つまり学習者の多くは「初級止まり」なのである）に対するレベル分けが、やや大味である。これは、CEFR 全体にも言えることである。絶えず動機づけが必要な人たちに対して、「これができるようになった！」という達成感や自己肯定感を持たせるには A 段階、就中 A1 の設定方法が重要なのではないかと考える。』

また、『一言で言うと Can-do 記述文が抽象的過ぎて』具体例がなくて評価者にもピンとこない、というコメントがある。この印象に対し、『社会・文化的コミュニケーション能力と言っても、実際の運

用か、コミュニケーション上での受容か、という観点でレベル分けや段階評価が異なると思われる。その点が曖昧な気がする。』という、言語能力の技能別の能力測定設計の重要性を指摘する意見があった。日本語教育専門家の方からの意見でも別の所で、4 技能別の能力基準があるべきだという考えを出されている。CEFR2001 の言語使用に必要とされる各能力については、技能別の能力評価表が提示されているので、早晚、EU ではこの社会・文化的コミュニケーション能力についても、運用上の技能別の評価表が開発されることが予想される。

別のコメントとして、言語別・国別の評価基準の必然性を主張する回答者がいた。『詳細に社会・文化レポーターを考慮していくと、各言語で異なる評価表になるわけだが、同じ言語でも国が異なれば、社会・文化的コミュニケーション能力の評価基準も異なってくるのではないだろうか。』CEFR が通言語的評価基準を掲げていても、実際の運用は言語ごとにカスタマイズされるし (Byram & Parmenter を参照)、EU 内でも各国で言語ごとの教材に CEFR を落とし込んでいくプロセスで、評価の重点項目や偏りは避けられないし、全く同じものをそのまま適用できない。

アジア諸語への適用に向けたカスタマイズ

現実を踏まえると上記の意見は確かに正論であり、まさにこの理由で本研究プロジェクトはアジア諸語への適用に向けてカスタマイズしようとしているのである。

同様の意見として、『評価項目の中に対象言語特有の社会・文化的コミュニケーション要素が明文化されることで、異言語・異文化間の違いを気付かせることにつながることを期待される。特に ASEAN 域内においては、社会・文化的な能力評価は言語圏ごとに微細に異なる可能性が高く、その社会・文化的な微細な違いにこそコミュニケーションの難しさがあるものと思われる。一方で、アジア言語統一の基準の内容を作り上げることには難しさを感じる。各国語言語別に社会・文化的コミュニケーション能力評価も含めたレベル分けや段階評価については必要であると考え、アジア言語統一での共通要素については CEFR のように抽象的にならざるを得ない可能性がある。』

しかし、反面、あまりに軸となる規準を軽視して全く自由に CEFR 対応表に「似せた」評価表を増産してしまうと、通言語的透明性が阻害される可能性が生まれる。我が国の大学入試に CEFR 対応をうたう民間の語学能力検定試験の受験結果を利用しようとする動きがあるが、通言語的公平性はどこで担保できるか、保証の限りではない。

EU をはじめ、そして我々の開発研究を含め、それぞれの言語圏や地域・国などで、特質的な社会・文化的与件を考慮した「CEFR 各言語圏版」を検討し始める時期にきているのではないかと予見する。

「社会・文化的適切性」の評価方法について

言語運用能力と社会・文化的に適切な言語行動とを明確に切り分けることは不可能である以上、能力評価に別々なものとして設計することは矛盾するかもしれない。これは必然的に CEFR レベルの段階に振り分ける作業にも関係してくる。ただし、どのように能力を確認するか、という方法論の問題については、デスク上で採点することには慎重な意見があった。『社会・文化的コミュニケーション能力評価は自己評価があり得ないのではないかと、という気がします。あくまでコミュニケーションの相手側がどう感じるか、というのが「適切さ」の判断根拠となる以上、相手からの明確なシグナル（拒絶反応など）が発せられない限り、評価対象者が判断する手段はほとんどないと思われるからです。』つまり、インタラクティブな言語行動の中で、学習者が相手の反応に無自覚か、理解不足の場合は、自己評価のしようがない。ましてや、デスクで自己評価の紙を渡されて該当欄にチェック印をつけるのは、見当外れというリスクも否定できない。

さらに、言語能力の判断でも我々自身経験することであるが、外国人学習者であることで相当な割引価格的な、一種の甘やかしがないとは言えない。ましてや、『「社会・文化的に適切な言語行動」(の評価)は少なくとも「完全に適切」「適切ではないが(非ネイティブの言語行動としては)許容可能」「完全に不適切」の三段階に分かれるのではないか』という見解があった。

社会・文化的サブリメント(Supplements)の付加

能力記述文(Descriptors)が抽象的すぎるのでこれらを利用して設計しにくいというコメントが複数あった。能力評価表にトピック例や具体例が付記されていると理解を助けることになるが、本研究では、能力記述文には言語別の設計では抽象度を求めず、場面や文化背景などを解説する社会・文化的サブリメント(Supplements)を付加することにより、それぞれの項目で言語行動タスク・社会・文化的方略・能力レベルを理解しやすいように改良した。願わくば学習者の自己評価の際にも参考となれば幸いである。

日本語教育専門家により、別の試みが紹介されているので転記する。『AJ Can-do リストでは、各技能・レベル別に「参照サンプル」をつけました。これは、2年かけて学習者の産出データ(作文や口頭発表動画)や読解、聴解教材を集めて、精査して作成したものです。教育工学の専門家の方をお呼びして勉強会をしたときに実際の参照サンプルをつけるのがいいのではという助言をいただき、担当教員で作成しました。』本研究の発案である社会・文化的サブリメントは有効と考えるが、さらに、「参照サンプル」を付加することで、言語教育プログラム設計者や評価者の理解を助けることになる。

(8)『「社会言語的適切性」は CEFR2018 年版で強調されている部分ですが、それについて、ご提案・ご意見があれば書いてください。』

「社会言語的適切性」(Sociolinguistic Appropriateness)の概念再考

まず、社会言語的という概念について補足しよう。CEFR2018 で使う「社会言語的適切性」(Sociolinguistic Appropriateness)には、「文化」面を排除した用法はない。また、社会言語的能力の章では文化面、特に複言語・複文化社会での文化接触を取り上げてコミュニケーション能力評価表を提示している。この文化的側面の含意を前提に本研究では、社会言語的適切性という用語を一種の専門用語的に使用している。ただし本研究の課題名では「社会・文化的」としているが、2つの側面をそれぞれの特質により分離して並立的に把握しているからである。文脈により「社会文化的」という表現をとることがあるが、これは CEFR2018 で強調されている社会言語的能力(Sociolinguistic competences)という概念を準用している。「社会文化的」としたのは、CEFR2018 での記述では「言語コミュニケーションに関わる」範囲の社会的および文化的要因を合わせて社会言語的能力のうちに内包しているからである。なお、本稿で引用した文章中での「社会文化」「社会・文化」については出典の表記を尊重してある。

しかしながら、「文化」という語にはあまりに広い概念が外に広がるため、『「社会言語的適切性」については、言語的な部分、社会関係の言語マーカーの適切な使用、ポライトネスを示す言語表現は社会言語的と言えますが、「社会文化的」となると、慣習的な行動までを指すのでしょうか。例えば、日本社会では、どこか行けばお土産を職場や家族に買って帰ります。また、お歳暮・お中元、冠婚葬祭のお返しなど「贈り物文化」がありますが、そのような行動も視野にいれるべきなのか迷ってしまいます。』という率直な疑問もある。しかし、下記の「どこを測るか」で記したように、文化的行動を言語教育の成果として期待する、のではなく、社会・文化的すれ違い(例えば、訪問時に手土産を持っていくか、持たないか、での戸惑い)があったとき、不要な誤解などを解くべく会話のトピックとして「贈り物文化」について自分と相手の文化習慣を語り説明する能力があれば、円滑な人間関係を維持できることにもな

る。決してどちらかの社会・文化習慣に染まる染めることを目的とするわけではない。

我々がたずさわる外国語教育は「異文化間コミュニケーション能力」の習得を基本的役割のひとつとするが、これは、単に言語能力の獲得だけではなく、学習者自身の社会・文化的バックグラウンドとは異なる人々の間で「円滑に人間関係を保ち、より良い社会的関係を築ける能力」の育成を視野に入れていえると言えよう。そういう立場に立つと、アジア諸言語地域の社会通念として認められる「適切性」については、学習対象地域の社会・文化的特性に沿って個別的に記述研究する必要があると考える。

どこを測るか：イマージョンプログラムとの違い

『「適切性」の追求が行き過ぎれば、それは新たな「正しさを追い求める言語教育」になってしまうかもしれない』という危惧するコメントもあったが、「適切さ」を測ることと、「正しさ」の教育とは理念的に異なる。よく誤解されるが、「社会・文化的適切性」の概念自体は、相手の文化に同化させるイマージョンプログラムではない、ということである。卑近な例をあげると、文化的違いとして引き合いに出される挨拶の付随行動（相手を抱きしめるハグや頬へのキスなど）、あるいは、ポライトネスにもかかわるが言語的に相手を持ち上げて表現する（お世辞、お愛想などを含む）は、それがどこまでネイティブのように自然にできるようになっているか、の評価では決してない。

CEFR2018 の評価の判断は、上の例で説明すると、自分がそのような挨拶行動がうまくとれない、あるいは心理的な障壁がある、という気持ちを相手の言語でどのように表現し、誤解を避け良い人間関係を構築・維持することができるか、という能力をみるのである。相手に社会の慣習や歴史的背景を含めて異文化間にある差異を説明でき、相手の反応に対してインタラクティブに差異を前提に解決する言語行動能力と言えるが、この点は非常に強調されていて、まさに改訂版の核心である異文化間の「仲介者」という能力を育成しようとする方向がみてとれる。

以下の2つの設問について、重なる部分を合わせてまとめよう。他の項目からも内容的に関わる回答は適宜参照している。

(2)「担当言語の教育現場では、どのような社会・文化的側面に配慮し、重視していますか？あるいは、あまり問題にいませんか？具体的例や理由を添えて書いてください。」

(3)「担当言語の教育に関して、固有の社会・文化的特質について、特に難しいと感じる事柄を書いてください。学習者を日本語ネイティブとして記述して結構です。日本語教育の場合は、外国語ネイティブ学習者、となります。」

ネイティブから直感的に学ばせる

学習言語のネイティブの先生や留学生たち（課外活動や宿題・課題提出など）と実際にかかわり、教室の内外、キャンパス内外で社会・文化的要素を体得できるようなチャンスを提供するように工夫している回答者がほとんどであった。キャンパス内での外国人比率が高い大学などでは、様々な企画をして彼らとの交わりの中で社会的・文化的要素を「体得」させることを主眼にしている。

ただし、

・全体としてはネイティブと交わることを仕掛ける一方で、教室では教員はネイティブとは違う役割を担うようにしている。

・同じ場面でも相手との年齢差や社会的立場によって異なる表現やコミュニケーション上必要な所作はネイティブ教員から教える。

・ネイティブの在日留学生との対面コミュニケーションを重視し、直接的なコミュニケーションを定期的に行うことをアクティブラーニングで必須としている。

・『人称表現、失礼にならない挨拶の仕方や距離を縮めるコミュニケーション（初期段階からのプライベートな話題）などコミュニケーション運用における重要項目（勧誘、断りなど）については、社会・文化的要素による違いを日本人学生間のグループで討議し、学生自身での気付きが得られるようにしている。その後、その差異を織り込んだ会話文を作成し、実際の会話演習を行い、実践での運用を目指している』という段階的な工夫をしている例がある。

感性の違いからくる文化ギャップの認識

非常に大きな教育機能を果たすネイティブ教員については、『彼らの宗教的価値観が学生にとって負担になっていないか気を配っている』という回答があった。直接の接触で日本人学生へのかなりの影響が察せられる。また、感覚的なギャップが指摘されていた。『社会・文化的性質というよりは、ネイティブ教員の教師像（学生は教師を敬い、教師の言うことは絶対的に従う）と現代の学生の教師像が違うことが互いの期待を満たせない状況を生んでいるように思う。これは国の違いというより、世代間の文化的違いだろう』この点は、特にネイティブだから、という理由にはならないだろう。

日本の隣国である韓国との例を引くと、特定宗教、経済(資本主義)、政治(自由民主主義)などの面で価値観が近いので難しく感じる事柄はそれほど多くないはずである。しかし人と人との間の距離の持ち方、話の展開のやり方など言語文化的な面で微妙に違うことがあるが、理解はしていても内面化までは難しい。例えば、韓国語では日本語より単刀直入的な言い方が多いが、それを分かったところで直接的な言い方をされて傷つくことがないわけではないということなど。こういうすれ違い的な心理のあやを説明し理解を求めるには、ネイティブ同士でも簡単ではないタスクであり、ましてや学習者にとってはかなり高度な言語能力が必要とされるのではないだろうか。

学習言語社会の特性に応じたカスタマイズ

CEFR では、上級にあたる C1 レベルになると高い言語能力で対話者に対して「…批判的な意見を述べるかまたは、強い不同意を社会的に表明することができる」表現能力を要求している。言語学で扱う語用論の機能タスクを見ても、あるいはポライトネス理論のポジティブ・ポライトネスの強調を見ても、EU 社会を前提にした自己主張的な文化が当たり前言語能力に反映している、と考えたら言い過ぎであろうか。これまでの我々の研究でアジア諸語における言語行動を概観すると、相手に積極的に働きかけるより、相手を無用に刺激せずに自分の発言意図を理解してもらえような方策（ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー）を好む傾向にあるようである。これは明確に「文化」の範囲に含めるかどうかは別として、双方のストラテジーの相違を理解し、それがコミュニケーションの障害とならないように言語表現や言語コードを選択する能力は、異文化間コミュニケーションの「仲介者」の基本能力に含まれる、と考えられる。

この点で日本語教育では、欧米的な談話ストラテジーとは異なる日本社会の特性に応じたカスタマイズで独自の能力記述項目を作っているのは注目に値する。『JF 日本語教育スタンダードでは「感情表現、間接的な示唆、冗談などを混ぜて、社交上の目的に沿って、柔軟に効果的に言葉を使うことができる」、本学の AJ Can-do リストでは「時事的・やや専門的なテーマについて、ある立場から賛成・反対の意見が述べられる。」「聞き手の反応を見ながら、あいづちやフィルターを適切に使って、会話が続けられる。」という記述文になっており、日本語のほうは、C1 レベルで相手との談話調整能力を重視している』という点で参考になる。

社会・文化的要素に関わる教材と教授法

当然のことながら、学習対象言語の社会や文物について見たこともないものを映像や文字のみで理解させるのは難しいが、ドラマや映画などを通して相手国の社会・文化が多く紹介されている題材を初期から扱う言語が多い。1年生には日本との比較も行い、また映画やドラマと実際のギャップについても言及、2年生以上は彼らの留学や交流を通じて得た経験などを題材にして様々な気づきを促すようにしているとの回答が典型的であった。

学習対象国の重要な祭祀儀礼について理解を深めさせるためには内容のある教材を選択するように配慮しているというラオス語の工夫があげられる。タイ語教育では、『仏教の価値観に基づく考え方・行動基準（例：徳を積む考え方、無常観、仏暦）、宗教の位置づけ（タイ社会における無宗教への違和感）、王室、政治に関する話題を取り上げる際の注意、コミュニケーション・ストラテジー（例：相手を褒める、褒められた時の反応）、お礼の言い方（時間が経過した後に再度言わない）、謙遜の仕方（例：プレゼントをあげる時に謙遜しない、家族を低く言わない）、自分自身も低く言い過ぎない、相手や場面に応じた人称表現や小辞（特に上下関係の明確化）など、多岐にわたり言語行動に反映する教材内容に配慮している。そこでは、日本人学習であるために日本とタイの社会・文化的な違いによって起こる異なる言語行動を重視』して教えている。

対照的に、日本人学習者には、日本人特有の配慮表現やコミュニケーション・ストラテジーが身体に染みついていて、例え頭で理解していたとしても、日本語からタイ語への切り替えとともに容易に切り替えられない（例：時間を空けてお礼を何回も言う、プレゼントの時の謙遜、褒め方、人称表現など）という観察がなされている。

文体コードのスイッチング

文体的なバリエーションが多用される言語では、書き言葉として公的な場面では定型句や書式の型などは必要と考えるため教室で教えても、現地に行かない限り運用の機会がなかなかないので定着しにくい。日本語教育では、『機能会話のときには社会文化的な談話展開などを練習するが、日本語学習者にとって難しいだろうと思うのは、書き言葉と話し言葉の適切な使い分けである。アカデミックな日本語の場合、「である体」で書かれているものを「です・ます体」でプレゼンテーションするなど、文体、文型、語彙の変換など言語操作が複雑だ』というように、文体コードのスイッチングが難易度の高いレベルであろう。教材を自主開発して、機能会話やインタビューのしかた、ディスカッション・ディベートでの論理的な述べ方や意見の主張のしかたなどを学ばせているそうである。

マレーシア語では『フォーマルなスピーチで長い導入表現が存在する。敬称などもかなり長く、様々なものがある。』というように慣用表現や定形、敬称の織り込みが高度なスキルを要求する。

相手や話題の人間・事物に対する敬意の表現：特に人称詞と呼称

EU 諸語のような敬語体系の薄い言語でも、相手に対する一定の配慮表現は豊富に持っている。CEFR2001 では、そのような文体差は言語能力の高いレベルとして語彙や人称詞などを例に具体的に説明されている。アジア諸語のうち日本語と同じく敬語に相当する体系を持つ言語では、似ているようでも、その使用法が異なる場合がある。例えば韓国語では、相手との距離・上下関係と状況の適切な判断が必要で、身内や会社の上司に対し尊敬語を使わなければならないことや授受表現が複雑なメカニズムをもち、日本語の「～してください」とその直訳表現とでは微妙にズレていることが学習者にとってハードルが高い、という。

本研究で扱うアジア諸語の多くには親族名が複雑であることがあり、初学者にとって圧倒的に難しいのはそれに関わる人称詞・呼称の用法である。年齢や社会的地位、親疎関係によって、人称詞や親族名称を使い分け、さらにラオス語のように敬讓表現の一つとして相手の視点からみた表現を用いることによって敬意を表す言語がある。(例：相手が年齢や社会的地位が自分よりも上の場合、相手の視点から「行く・来る」や「やりもらい表現」を使う)

ビルマ語では丁寧さを表す要素が、(1) 文構造内に現れる要素と(2) 文構造外に現れる要素とがある。文構造内に現れる要素としては丁寧の助詞がある他、構成的な尊敬表現は普通体と対立して用いられる。以下、パラフレーズした概略を引用する。

『語彙的に普通体に対する尊敬体を持つ場合もあるが、さほど多くなく、この語彙的な尊敬体は構成的な尊敬体と共起する、という。

言語構造・文法組織ではないが、人称詞あるいは人物指示詞の選択は重要で、決して付加的な要素と考えることはできないことから、初級者から教える必要がある。会話参加者同士がフラットな関係な場合とそうでない場合とで区別し、教室ではきちんと説明するようにしている。

また(A2~B1 ぐらいまでは)「自分をどう呼ぶか」より「相手をどう呼ぶか」の方が重要だと考えている。

	自分	相手
自分をどう呼ぶか	<ul style="list-style-type: none"> ・[~B1]「私」固定で問題ない ・[B2~] 相手に応じた使い分けが必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・状況により変化する(察知しやすい)
相手をどう呼ぶか	<ul style="list-style-type: none"> ・[~B1] 相手に応じた使い分けができることが望ましい ・[B2~] 相手に応じた使い分けが必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・状況により変化する(察知しにくい)

「固有」と言えるかどうかは分かりませんが、日本にはない、社会や文化に根ざす言語的慣習は難しい。またレベルにより、関わる (involve される) であろうという難しさは異なる。

・[~B] 相手との親しさにより、儀礼的言語行為(感謝、謝罪など)を行うべきかどうかの判断が難しい。一般にポライトネスと正比例の関係にあると思われる。

ポライトネス	低い	⇔	高い
儀礼的言語行為	避ける	⇔	必須

- ・[C~] 諧謔(ザガレイン「捻れ言葉」)、修辭的な表現。
- ・[C~]上記のポライトネスと儀礼的言語行為との関係を意図的に崩すことなど、人間関係のコントロール。
- ・[C~] 話題の選択。』

ビルマ語では、人称詞あるいは人物指示詞の選択は重要で、決して付加的な要素と考えることはできないことから初級者から教える必要がある。ここで対話者との関係や話題に関わる発話の動的メカニズムに注目すれば、ポライトネス概念の援用はとてもわかりやすい説明である。

社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法をめぐって：アジア諸語版の試み（2018-2019）
－アジア諸語を対象にしたCEFR受容で見てきたものと捉えがたいもの－（富盛伸夫）

Issues on the communication ability evaluation method in consideration of socio-cultural characteristics: Asian Language Prototype (2018-2019)－What has been seen and What is hard to see in the Acceptance of CEFR for Asian languages－
(Nobuo Tomimori)

(9) その他、ご意見があればご自由に書いてください。

言語教育には対象社会の社会・文化的な変化に敏感であること

回答のひとつに、教育担当者に必要な態度として社会の変化に無関心であることが許されない、という意見があった。

『社会・文化的なコミュニケーション能力について、「論ずる」「教える」「習得する」のいずれに関しても、相当な接触時間が必要であると思います。また、社会・文化は固定的なものではなく、かなり流動的で、しかもスピード感がある変化を遂げている、したがって、ある言語の社会・文化的なコミュニケーション能力を教えるに際しては、その社会の変化に敏感であることが求められている気がします。これは精神的に大変な負担であると同時に、好奇心や探求心を大いに刺激される、素敵なことだと、わたしは考えています。』

日本語・日本人の発話行動の特質に注目

上記の「学習言語社会の特性に応じたカスタマイズ」の項で触れたように、日本語教育では日本人の社会・文化的言語行動様式にある程度対応した談話的調整機能を反映する教材や能力記述項目を設定すべきだというコメントがあった。

『私の個人的な感覚ですが、CEFR リストの言語構造的な能力「一般的な言語使用範囲」のところでは、「自己表現ができる」というのが中心軸にあるように感じました。一方、JF スタンドでは「感情表現、間接的な示唆、冗談などを交えて柔軟に効果的に対応することができる」「なめらかに議論点を発展させることができる」とあるように、間接的な発話が好まれ、相手と不同意表明により対立するのではなく、なめらかなやりとりを志向する傾向があるように思います。AJ Can-do リストでは、上のレベルに行けば行くほど、「聞き手の反応を見ながら、相づちやフィラーを適切に使って、会話が続けられる」というように相手に応じて行動をとることが優先されるように思いました。』

日本人特有と言えるのかどうかはわからないが、少なくとも日本人社会にある、一種の言語的「気遣い」がネガティブ・ポライトネス的な働きを見せていることは否定できない。極端な表現になるかもしれないが、ここに例としてあげられた西欧と対照的な発話の態度、対話者に対する配慮、発話意図の落とし所に至る談話ストラテジーが教材開発に反映している、ということには関心が惹かれる。しかし、上述のように、これが日本語談話の特性であるとしても、そして教材に活用されているにしても、学習者にとって同化して身につけるべき「日本人化」が言語教育の目標であるとは限らない。繰り返すが、これらの発話態度などの違いを認識し、差異を自覚して、相手との社会・文化的心理ギャップがあったときに乗り越えて問題解決ができる能力を育成し測るのがCEFRおよび言語教育の基点であると考えられる。

アジア諸語共通、そして各個言語に適した能力評価法を模索

タイ語教育担当者からの建設的な提案があった。『ASEAN において複社会化は進行しているものの、その変化に即した対策は、少なくともタイでの外国人向けの言語教育含め十分ではない。「外国語としてのタイ語教育」のスタンダード化について、タイ本国では積極的な動きがまだ見られないため、本プロジェクトをはじめとした日本の研究チームがアジア諸語をリードしていくことを期待し、その一連の動きの中で、アジア諸語共通、そしてタイ語に適した能力評価法を模索していきたい。』

本研究のフィードバックを

本研究で模索してきた素案「社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法：アジア諸語版」については、

『実際の使用者からの何らかのフィードバックがあった方がいい。マレーシア語、ラオス語、クメール語では無理だが、複数の大学に多くの学習者がいる言語では、今回作った素案がうまく使えるか、作成に関与していない教員に試してもらったら面白い。試してもらえるかどうか、上の必要性などの意識を知るための手がかりになりそう。いずれにせよ、素案に対しては、実際の使用者からの何らかのフィードバックがあった方がいい。』

という提案があった。まことに、企画者もそのような方向で研究展望を具体化してゆきたいと考えている。

最後に再び留意すべき点に戻ると、*CEFR2018* で採用した「適切性」という評価作業用の概念ツールを用いて能力を判別することの難しさ、判断の微妙さを鑑みると、本研究で検証に参加してくださった研究分担者・協力者の方々の直言を十分に汲み取って、さらに多くの言語・文化を対象に実際のケーススタディを積み重ねていく必要があるということを確認した。*CEFR2018*:34 でいうように、「適切性」という社会・文化的概念装置自体は「連続体」であり基本的な特質といえる。しかるに、それをツールとして用いて社会・文化的コミュニケーション能力を評価するには離散的なスケールを便宜的に用いざるをえない、という方法論上の制約があることも認める必要がある。

一般的に学習者は学習対象社会に入りネイティブと交わることで、社会・文化的な誤り・試行錯誤を自らの言語行動・非言語行動で初めて認知する。このようにして一回一回の社会的相互行為である言語行為をして、自分とは感性をもともと共有しない「他者」との違いに気づく。この学習プロセスを考慮に入れると、連続体的な「適切性」を一元的に段階的・離散的なスケールで妥能力評価することに妥当性があると言えるのか？我々は共同研究の中で、アジア諸語圏の社会・文化的特質を相互対照することで、意識上のあるいは意識下の、各地域特性の適切な言語（行動）と言語表現を抽出し相対化してきたが、言語学習者にとって「他者」の社会・文化的枠組みに学習者自身が足を踏み入れて他者の要求する「適切性」にどこまで同化・馴化すべきかどうか、また、その「適切性」を教室という現場の教育プログラムの中で学ぶ必要度はどれほどのものか？という自問自答については、常に言語教育者の内にジレンマとして残るであろう¹⁶。

4. おわりに：アジア諸語への CEFR 適用の妥当性研究の意義と今後の展望

我々は研究課題としてアジア諸語への CEFR 受容に関わる諸問題と向き合うことにより、*CEFR2001* の基本理念と言語（教育）観を尊重しつつも、必要であれば CEFR 適用可能性を世界に逆提案することで、EU から提示された言語教育観の相対化をはかる契機にもなることを期待したい。また本稿で検討した、*CEFR2018* で掲げられ我々の関心を特に惹きつけている複言語・複文化間の仲介能力の育成と評価方法についても、具体的かつ相互作用的に寄与できるかもしれない。

数年来研究対象としてきたアジア諸語教育の分野で、異文化間のコミュニケーション能力評価記述文に各アジア諸語の特質に応じた「社会・文化的適切性」の概念を組み込んだ付記事項を加えるようとする我々の試みは、まさに *CEFR2018* で提示された新たな方向性と同じくするもので、企画者としては研究意欲を新たにしているところである。また、我々のアジア諸語教育研究に言語記号の機能的転化作用

¹⁶ 筆者自身の欧州での日本語教師の経験で、日本語の「女性言葉」や「長幼の年齢順」「社会的地位と親疎の相関」による社会・文化的レジスターについて学習者の側から適切性の規準や学習必要度について厳しい意見を受けたことを想起する。

社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法をめぐって：アジア諸語版の試み（2018-2019）
—アジア諸語を対象にしたCEFR受容で見てきたものと捉えがたいもの—（富盛伸夫）

Issues on the communication ability evaluation method in consideration of socio-cultural characteristics: Asian Language Prototype (2018-2019)—What has been seen and What is hard to see in the Acceptance of CEFR for Asian languages—
(Nobuo Tomimori)

を活用したポライトネス概念を援用し再評価する過程では、アジア諸語の事例研究から欧米社会・文化を前提にしたいわゆるポライトネス理論という枠組みそのものの批判的検討をする必要を予感した。

本研究では、このような新たな研究課題を前にして、日本語を含めたアジア諸語の社会・文化的適切性の対照研究と一般言語学、特に社会言語学分野との交流を視野に入れている。今後はこの問題意識をアジア諸語の教育現場で検証することにより、言語教育学と一般言語学研究と相互的還流から得られる何らかの寄与を生み出せるようにめざしたい。

参考文献

- Byram, M.; L. Parmenter (eds). (2012). *The Common European Framework of Reference – The Globalisation of Language Education Policy –*, Bristol.
- Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*, Cambridge University Press.
(<https://rm.coe.int/1680459f97>)
- Council of Europe (2018). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment, Companion Volume with new descriptors*.
(<https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989>)
- Halliday, Michael A. K. and Ruqaiya Hasan. (1976). *Cohesion in English*. London, Longman. 374p.
- Halliday, M.A.K.; R. Hasan (1885). *Language, context, and text: aspects of language in a social-semiotic perspective*, Oxford: Oxford University Press.
- North, B. (2016). 'Updating and extending the CEFR Descriptors' Eurocentres, PPT. 「学習者コーパスによる英語 CEFR レベル基準特性の特定と活用に関する総合的研究研究成果報告シンポジウム」2016年3月6日.
- Silverstein, Michael. (1976). "Shifters, linguistic categories and cultural description." In K. Basso and H. Selbv (eds.), *Meaning in Anthropology*. Albuquerque: University of New Mexico Press, pp.11-55.
- 富盛伸夫. (2014a). 「CEFR のグローバル化と異文化間コミュニケーション能力の諸問題: Michael Byram and Lynne Parmenter (ed), *The Common European Framework of Reference – The Globalisation of Language Education Policy –* (Bristol, 2012) を読んで」 in 富盛伸夫 (2014b). pp.63-72.
- 富盛伸夫. (2014b). 『アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究 — 中間報告書 (2012-2013) — 』(編集代表, 富盛伸夫) 125p. 富盛伸夫 (2015). 『アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究 — 成果報告書 (2014) — 』(編集代表, 富盛伸夫)
- 富盛伸夫. (2015). 『アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究 — 成果報告書 (2014) — 』(編集代表, 富盛伸夫) 140p.
- 富盛伸夫. (2018). 『アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究 — 成果報告書 (2015—2017) — 』 (編集代表, 富盛伸夫)
- 富盛伸夫; YI Yeong-il. (2016). 「アジア諸語学習者における CEFR 自己評価の傾向と社会・文化的コミュニケーション能力に関わる諸問題 — 学習者アンケート調査 (2014) の分析から —」 『外国語教育研究』 No.19, 1-18.
- 富盛伸夫; YI Yeong-il. (2017a). 「アジア諸語学習者における CEFR 自己評価と社会・文化的コミュニケーション能力の測定指標の開発」, 『アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証 — 成果報告書 (2017) — 』(藤森弘子編, 平成 26-28 年度科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 課題番号:26284070, 東京外国語大学)
- 富盛伸夫; YI Yeong-il. (2017b). 「TUFUS 言語モジュールを活用したアジア諸語の社会・文化的特質の指標化」 『外国語教育研究』 No.20, 207-217.

執筆者連絡先: tomimori@tufs.ac.jp

本稿は科学研究費助成事業基盤研究(B)「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」(2018 年度—2020 年度、研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号 18H00686) の研究成果のひとつとして公開するものである。

社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法をめぐって： アジア諸語版の試み（2018-2019）
 - アジア諸語を対象にした CEFR 受容で見えてきたものと捉えがたいもの -（富盛伸夫）

Issues on the communication ability evaluation method in consideration of socio-cultural characteristics: Asian Language Prototype (2018-2019) - What has been seen and What is hard to see in the Acceptance of CEFR for Asian languages - (Nobuo Tomimori)

科研 社会・文化的適切性CEFR表_日本語(中間報告書)

言語行動のタスク	社会・文化的方略	CEFRレベルの目安	能力を判断する手がかり(Descriptors)	日本語の社会・文化的特質の補足的説明 (Supplements)
ビジネス場面で相手が不快にならない行動がとれる	適切な社会的関係を保つ	C2	ビジネス場面においてウチ・ソトの社会的関係を理解し、コミュニケーションが円滑にできる	日本のビジネススタイルを理解する
文章を書く・口頭で表現する。文章や話を理解する	多様な文体・言語資源を用いて効果を上げる	C2	物事を円滑に進めるための潤滑油的表現を理解し、発することができる	日本の社会・文化に基づく笑いや言葉遊びの理解と運用。
定型表現の挨拶を使って、へりくだって相手を高める	適切な社会的関係を保つ	C2	冠婚葬祭や行事などで、定型表現の挨拶を使うことができる	「ご賞配賜りますようお願い申し上げます」「御座ながら、一言ご挨拶申し上げます」「ご整備までございます」
公式文書を書く	文体差で場面に最適化する	C1	公式な挨拶文や依頼文などを書くことができる。	書き言葉特有の定型文を理解し運用できる。
俗語や慣用句などが理解できる	相手との関係を保つ	B2/C1	自分が所属するコミュニティで使われる言葉が理解できる	若者言葉や職業による慣用語の言語理解と運用。
地域方言が理解できる	相手との関係を保つ	B2/C1	自分が所属するコミュニティで使われる方言や独特の言い回しが理解できる。	日本の地域社会に対応するための言語理解と運用。
待遇表現を用いて、ウチ・ソトの関係を示す	相手との社会的な関係を保つ	B2	相手にウチのことについて話しているのか、ソトのことについて話しているのかを伝えるための敬語が使える	「家族の呼称の使い分け:例)私の父、山田さんのお父さん」 「相手に応じた待遇表現形式の適切な使用:例)「膝下」に持ってきてませう」「今度お話しさせていただきます」「教えてやるよ」
相手に応じて、交渉を含めた依頼・詫言・約束をするなどの適切な語や表現を使って会話が続けられる	相手との関係を保つ	B2	適切な表現で依頼・勧誘・提案することができる。相手の反応から相手の意図を把握し適切に反応することができる。	依頼の負担度に応じて、詫言表現や前置き表現を適切に使うことが重要。
再感謝	以前に、相手から何らかの恩恵を受けたことについて再感謝する	B2	過去に相手から恩恵を受けたことについて再感謝ができる	「この間はどうぞありがとうございました」など再感謝する
不同意の表明	適切な表現で相手に不同意、共感できない気持ちを示す	B2	相手の意見や行為に対して不同意、共感できない旨を丁寧に伝えることができる	「それはそうです」「もちもですが」「おっしゃることはわかるんですが」「あなたの謙遜の表現を用いて、「～んじやないかと思っています」など婉曲的な表現を用いて理由と共に不同意を表明する
感謝表現を述べる	適切な表現で相手に感謝する	B1/B2	相手の行為に対して丁寧に感謝できる	「これからお世話になります」「(ex.ホームステイ先で)「お世話になりました」「色々連れて行ってくださって有難うございました」などが適切に使える
他者からの恩恵を受けたことを述べる	「テレル」形式を用いて恩恵・感謝を表す	B1	他者からの恩恵行為に感謝する。	先生、教えてくださって有難うございました」「～さん、教えてくれてありがとう」のように相手との社会的距離によって恩恵表現を適切に述べるができる。
謙遜する	ほめられたことについて謙遜する	B1	相手からの褒めに対して謙遜することができる。	相手にほめられたとき、「いえいえ」「まだまだです」と謙遜する
依頼をする	適切な表現で相手に受け入れてもらう	B1	相手に応じて、適切な表現で依頼することができる。	親族の距離に応じて、丁寧体が普通体で依頼するか使い分けができる。「よかったですら今度の週末、パーティーに行きませんか」「今週末、パーティーがあるんだけど、一緒に行かない？」
談話継続を用いて会話を管理する	相手との関係を保つ	B1	相手の状況に応じて、会話の開始や展開、終結を相手に伝えることができる	・会話の開始部:あつ、すみません、など ・会話の展開:トピックの交替:ところで、じつは、それじゃ、それに、など ・会話の終結:じゃ、ではまた、など
興味、関心のあるトピックについて相づちや聞き返しなどを使って短い会話が続けられる	相手との関係を高める、深くする	A2/B1	相づちや聞き返しを入れながら、短い会話を続けることができる	「いい天気ですね」「昨日のパーティー、楽しかったですね」など天気、相手の様子、近況、共通の経験などを相手に伝え、短い会話を続けることができる。 「ええ」「はい」「へえ」「本当」などの相づちを使って会話を促進したり、わからないときは「ええ?」「どういことですか?」などの聞き返し表現を用いて会話を続ける。
話し、断りなど基本的な言語機能を実行できる	相手との関係を保つ	A2	相手を誘ったり、理由をつけて断ったりすることができる。	「よかったです」「もしまだあったら」などを付けて丁寧に誘う。 「断る時は、「～はちょっと…」のように言いさし表現で断るような間接的表現を使う。
情報を求める	適切な社会関係を構築する	A2	簡単な表現を用いて、相手の状況や興味などを確認できる。	出身や現在の状況、週末の過ごし方など共通の話題を探ることにより、相手との会話の糸口を探したり、心理的な距離を縮めることができる。(※相手の年齢や給料など直接的に聞いてはいけない)
ごく身近なことについて簡単なやりとりができる	相手との関係を保つ	A2	「です・ます体」でごく短い会話を続けることができる	「切り出しの表現「あつ」「すみません」が適切に使える ・「そうですか」とあいづちを行って、相手の発言を理解していることを表す。 ・終助詞「ね」を文末につけて相手への共感を表すことができる。
自己紹介する	適切な社会関係を構築する	A1	自分についての簡単な情報を与えたり、相手の情報を得たりすることができる	名前、出身地、職業などについて話すことができる
基本的な挨拶をする	基本的な挨拶・自己紹介とおして、基本的な社交関係を作る	A1	基本的な挨拶・自己紹介ができる	・おじぎをしながら挨拶できる。 ・「～さん」「～先生」など呼称をつけて呼ぶことができる。 ・基本的な関係維持表現の「どうぞよろしく(お願いします)」を定型表現として使える。

韓国語コミュニケーションにおける社会・文化的適切性のレベルと能力評価項目(報告書)				
言語行動のタスク	社会・文化的方針	CEFRレベルの目安	能力を判断する手がかり(Descriptors)	韓国語の社会・文化的特質の補足的説明 (Korean Supplements)
仲裁する	社会・文化の差異を理解できる	C2	韓国話言語の社会・文化の差異を理解し、ビジネスやトラブル解決などの場面で効果的に仲裁することができる。	お互いのコミュニケーションスタイルの差異などを理解し、タイのストラテジーに則した形で効果的にコミュニケーションを行う。
文章を書く・口頭で表現する。文章や話を理解する(スラングなどへの対応)	社会・文化の差異を理解できる	C2	タブーとされる話題を避ける・スラング・悪口に適切に対応することができる。	注意を要する話題=地域差別・出身校差別や住む地域の差別。前者は悪口やスラングをたくさん使われる傾向があるため、それに対する自分のストラテジーを持つ必要がある。
文章を書く・口頭で表現する。文章や話を理解する(ユーモアなど)	多様な文体・言語資源を用いて効果を上げる	C2	物事を円滑に進めるための滑油的表現を理解し、ユーモアを混じって表現することができる。	韓国の社会・文化に基づいた笑いや言葉遣いの理解と運用。
文章を書く・口頭で表現する。文章や話を理解する(婉曲・反語など)	多様な文体・言語資源を用いて効果を上げる	C1	婉曲的な表現・反語的表現・ユーモアを理解するとともに、適切に使うことができる。	皮肉・反語法などを使うことで親近感を表現したり場を和らげようとする場合が多い。
文章を書く・理解する(公式文書)	多様な文体・言語資源を用いて効果を上げる	C1	公式な挨拶文や依頼文などを書くことができる。	書き言葉特有の表現や定型文がある。
文章を書く・口頭で表現する。文章や話を理解する(書き言葉と話し言葉の使い分け)	多様な文体・言語資源を用いて効果を上げる	B2	場面に応じて、話し言葉と書き言葉を適切に使い分けことができる。	話し言葉と書き言葉では文末だけでなく、語調や代名詞なども異なる。
文章を書く・口頭で表現する。文章や話を理解する(間接話法)	多様な文体・言語資源を用いて効果を上げる	B2	聞いた内容を伝えたり、自分の体験を伝えたりのように話すことで臨場感のある表現ができる。	2つの場面を1つの文に表現する韓国語の文の特徴を理解し、使うことができる。用言1語の活用形が表現され、人称や時法が変わるうえ、話し言葉でも使われる項目。
文章を書く・口頭で表現する。文章や話を理解する(慣用句の使用)	多様な文体・言語資源を用いて効果を上げる	B2	相手の理解を深めるための手段として、効果的に慣用句を使うことができる。	自然な自分の意思の理解促進のために使用するタイのことわざや慣用句の高度な運用。
文章を書く・理解する(メールや手紙など)	多様な文体を用いて効果を上げる	B1	メールや手紙などにおいて相手との関係や脈絡に合う、丁寧かつ気持ちが伝わるあいさつが書ける。	対話者との距離を縮めることができる。
謝罪のやり取りをする(定型句を使わない)	対話者の心理をつかむ	B1	適切に謝罪したり応じることができる。	申し訳ない気持ちを伝えるとともに、場合によっては代案を提示することもある。親しい関係での些細なことに関しては明確な謝罪はせず、相手の気持ちに対する共感表現を使うことが多い。
依頼・勧誘・提案をする	対話者の心理をつかむ	B1	適切な表現で依頼・勧誘・提案することができる。相手の反応から相手の意図を把握し適切に反応することができる。	依頼内容の意図に応じて、対話を予め提示するなど、相手が快く依頼を受け入れる表現ができる。間接的な拒絶・受け入れなどもあるのでその意図を把握する必要があり、分からない際には確認する必要がある。
文章を書く・理解する(相手を特定しない)	文体差で発話場面に最適化する	A2	相手を特定しない文章や指示文を書いたり理解することができる。	終結語尾の使用により格形式と非格形式の差を区別することができる。新聞記事や公文書などの文体を使い分けができる。
交渉する(売買などで)	適切な表現で人間関係を良好に保つ	A2	市場などでものを買う時、値段、数量や品目の交渉ができる。	市場等での値引き交渉は一般的であるが、定価が表示されているデパート、スーパー、コンビニ等では行わない。
趣味・好みを話題にする	適切な表現で人間関係を良好に保つ	A2	相手の趣味や好みを確認できる。	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手の距離を縮める。
依頼・勧誘・提案に対する意思表明をする(受け入れる)	対話者の心理をつかむ	A2	礼儀正しく依頼・勧誘・提案を受け入れることができる。	場面によってはすぐに依頼や提案を受けるのではなく、数回遠慮した後依頼・提案を受け入れることもあるが、親しい関係では素直に受け入れるのが一般的。
依頼・勧誘・提案に対する意思表明をする(断る)	対話者の心理をつかむ	A2	相手が納得できる内容で依頼・勧誘・提案を断ることができる。	受け入れるか断るかを分かりやすく伝える。丁寧に断り、断りの理由を添える。
依頼・勧誘・提案をする(定型句を用いて)	適切な表現で相手に受け入れてもらう	A2	定型句を用いて失礼にならないよう依頼・勧誘・提案することができる。相手の反応から相手の意図を把握し適切に反応することができる。	依頼内容に応じて、定型句だけでなく、状況に応じて柔軟に表現を使い分ける必要がある。相手との心的距離によって定型句は異なるため、適切な表現を使用する必要がある。
自己紹介のやり取りをする(年齢)	相手との心理的距離を縮める	A2	卒業年、誕生日、干支等を聞くことができる。	単純に年齢を聞くだけでなく、相手との関係性によって、卒業年、誕生日、干支等、聞き方を異なることもある。
挨拶する(定型句ではない)	適切な表現で人間関係を良好に保つ	A2	場面に応じて適切な、定型句ではない、挨拶表現を使うことができる。	朝、昼、夜の挨拶の定型表現が同じであるため、基本的な定型表現の代わりに食事や用事の確認などの表現を用いたり、対応することができる。その場を離れる際の表現も定型表現以外に多種である。
会話をする(文体の使い分け)	適切な文体を用いて効果を上げる	A1	相手との関係や場面により格形式と非格形式の使い分けができる	終結語尾の使用により格形式と非格形式の差を区別することができる。男女の違いはあまりない。
会話をする(呼称)	適切な表現で人間関係を良好に保つ	A1	相手との心的距離を縮める適切な呼称を使う。	疑似親族意識が強く、「おばあさん」「おじいさん」「子どもたち」といった親族名を使って相手を呼ぶ傾向が強い。フォーマルで丁寧な呼称を使い続けていると、相手との距離が短まらない。人稱代名詞をあまり使わない。
褒めのやり取りをする	適切な表現で人間関係を良好に保つ	A1	相手の外見、言動で気付いた点を一言、ほめることができる。	社交辞令的に相手の外見で気付いた点を単語一言で良いので、コミュニケーションのきっかけとする。
感謝のやり取りをする(定型句を使って)	適切な表現で人間関係を良好に保つ	A1	感謝の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	感謝は一度に大きく言い、後日、改めて言うことは少ない。
自己紹介のやり取りをする(職業)	相手との距離を縮める	A1	自分や相手の職業について質問を求めたり与えることができる。	社会的地位、特に職業については、適切な呼称のために必要。収入については親しい関係でないと聞かないのが一般的。
謝罪のやり取りをする(定型句を使って)	適切な表現で人間関係を良好に保つ	A1	謝罪する、または謝罪されたときに、定型句を使ってやり取りすることができる。	謝罪を受ける場合、相手側に責任がある場合であっても、まずこちら側が許すということを示すのが一般的な行為。
自己紹介のやり取りをする(年齢)	相手との距離を縮める	A1	相手の年齢を聞くことができる。	相手の年齢に応じて、敬語など言葉が変わるため、円滑なコミュニケーションのためには年齢情報が必要である。自分の情報を先に伝えたり相手の情報を求めるとスムーズになる。
自己紹介のやり取りをする(プライベートなこと)	相手との距離を縮める	A1	家族構成などプライベートなことを聞いて、または返答ができる。	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手との距離を縮めた上で、そこで入手した情報をもとに、今後のコミュニケーションにも活用し、より良い関係構築を行う。自分の情報を先に伝えたり相手の情報を求めるとスムーズになる。
自己紹介のやり取りをする(住居など)	相手との距離を縮める	A1	相手の住んでいるところを確認できる。	具体的かつ個人的なことを話したり聞くことで距離を縮める。自分の情報を先に伝えたり相手の情報を求めるとスムーズになる。
自己紹介のやり取りをする。(出身地、出身校など)	相手との距離を縮める	A1	自分や相手の出身地、出身校などについて質問を求めたり与えることができる。	同窓や同郷の場合、仲間意識、共感が強まり、それによって付き合いたい方や言語使用などが変わる。自分の情報を先に伝えたり相手の情報を求めるとスムーズになる。
挨拶する(定型句を使って)	適切な表現で人間関係を良好に保つ	A1	人間関係に応じて、定型句など失礼にならない程度の挨拶表現を使うことができる。	朝、昼、夜の挨拶の定型表現が同じであるため、基本的な定型表現は単純である。その場を離れる際の表現の使い分けが必要。

社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法をめぐって： アジア諸語版の試み（2018-2019）
 - アジア諸語を対象にした CEFR 受容で見えてきたものと捉えがたいもの - (富盛伸夫)

Issues on the communication ability evaluation method in consideration of socio-cultural characteristics: Asian Language Prototype (2018-2019) - What has been seen and What is hard to see in the Acceptance of CEFR for Asian languages - (Nobuo Tomimori)

科研・社会・文化的適切性CEFR表_ベトナム語報告書用20200328

(+) Positive politeness; (-) Negative pol.

CEFR難易度	Descriptors	言語行動のタスク	社会・文化的方略 (+) (-)	補足説明 (Supplements)
A1	人間関係に応じて、定型句など失礼にならない程度の挨拶表現を使うことができる。	定型句で挨拶する	定型表現より人間関係を配慮する (-)	挨拶の構成要素一定型句、人称表現、文末助詞
A1	相手との関係を考慮し、失礼にならない程度、人称表現を使うことができる	人称表現を使う	相手との社会的関係で礼儀を保つ (-)	自己紹介したり、簡単なやりとりをする際には相手との関係で失礼にならないように (最低限に) 適切な人称表現を用いる。
A1	相手との心的距離を縮める適切な呼称を使う。	親族名の呼称を用いる	親族名で呼ぶことで相手との距離を縮める (+)	疑似親族意識が強く、「おばあさん」「おじいさん」「子どもたち」といった親族名を使って相手と呼ぶ範囲が広い。フォーマルで丁寧な呼称を使い続けていると、相手との距離が縮まらない。
A1	相手の外見、言動で気付いた点を一言、ほめることができる。	相手についてほめる	言語的に好意を示すことで円滑になる (+)	社交辞令的に相手の外見で気付いた点を一語でいいので、コミュニケーションのきっかけとする。
A1	丁寧さや敬意を表す文末助詞を適切に使うことができる。	文末助詞を使う	丁寧表現を使うことで人間関係に配慮する (-)	文末助詞として、語や語の末尾につける語や、単独で返事に使用し、話し手の発話を、丁寧、礼儀正しい、思慮深い、柔和といった印象を与える語を使うようになる。
A1	相手の年齢を聞くことができる。	年齢を話題にする	相手との社会的な立ち位置を確認しあう (+)(-)	ベトナム語の特徴として、相手の年齢に応じて、人称代名詞(一人称、二人称)を変化させる必要がある他、言葉遣いや行動も変化する。
A1	家族構成などプライベートなことを聞いて、または選べる	家族を話題にする	相手のプライバシーに改めて踏み込むことで心理的距離を縮める (+)	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手との距離を縮めた上で、そこで入手した情報をもとに、今後のコミュニケーションにも活用し、より良い関係構築を行う。
A1	相手の住んでいるところを確認できる。	住所を話題にする	相手のプライバシーに改めて踏み込むことで心理的距離を縮める (+)	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手の距離を縮める。
A1	相手の収入や社会的地位(職業)を確認できる。	社会的地位を話題にする	社会的立場の確認をして適切な社会関係を構築する (+)(-)	社会的地位、特に職業については、適切な呼称のために必要。収入などを尋ねることもタブーではない。
A1	謝罪の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	謝罪する	定型句を用いつつ謝罪を受け入れる態度を示して相手との関係を保つ (-)	何度も謝罪を繰り返す必要はない。また、謝罪表現の出現頻度は高い。
A1	感謝の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	感謝する・理解する	定型句を用いて謝意を大きく示して相手との関係をよりよくなる (+)	感謝は一度言い、後日、改めて言うことは少ない。
A2	対話者に応じて、定型句+αの一言を添えることができる。	一言添えて表現・行動をする	相手との心理的距離を縮める (+)	+αの一言=家族の近況・外見をほめる など
A2	卒業年、誕生日、干支等を聞くことができる。	年齢確認をする	相手との社会的な立ち位置を確認しあう (+)(-)	単純に年齢を聞くだけでなく、相手との関係性によって、卒業年、誕生日、干支等、聞き方を変えることもある。
A2	相手の趣味や好みを確認できる。	趣味・好みを話題にする	相手との心理的距離を縮める (+)	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手の距離を縮める。
A2	市場などでものを買う時、値段、数量や品目の交渉ができる。	(売買などで) 交渉する	ベトナムの慣習にあった表現で円滑に交渉する (+)	市場等での値引き交渉は一般的であるが、定価が表示されているデパート、スーパー、コンビニ等では行わない。
A2	家族に関する話をする事ができる。	家族の話題を取り上げる	相手との心理的距離を縮める (+)	相手との共通点、会話のきっかけを探るうえで効果的。
A2	定型句を用いて失礼にならないよう依頼することができる。	依頼をする・理解する	人間関係に従った定型句で礼儀を保つ (-)	相手との心的距離によって定型句は異なるため、適切な表現を使用する必要がある。
A2	相手に応えるように、積極的な動議・提案ができる。	動議・提案をする	誠意を見せ相手に好意を示して誘う (+)	謙遜はあまりせずに、ポジティブな要素を述べて積極的に誘う。
A2	礼儀正しく依頼、動議・提案を受け入れることができる。	提案を受け入れる	謙遜な態度を示して相手に負担をかけない (-)	すぐに動議や提案を受けずに、少し遠慮した後依頼・提案を受け入れることもある。
A2	相手が納得できる内容で依頼、動議・提案を断ることができる。	提案を断る	避けられない事情を話して負担をかけない (-)	断罪に、直接的に断ってよい。また、断られた側はしつこく言い下らない。
B1	多様な文末助詞を効果的に活用できる。	文末助詞を効果的に活用する	モダリティや語用論的な効果をもつ (+)(-)	文末助詞には、話し手と聞き手の属性や両者の関係、聞き手に対する働きかけ、話し手の出来事に対する心的態度を表す機能がある。
B1	自他の社会的立場を的確に把握した上で、挨拶によって人間関係を効果的に構築することができる。	適切な挨拶ができる	社会的立場にあった人間関係を構築する (+)	対話者との距離を縮めることができる。
B1	内容に応じて適切に表現で依頼することができる。	依頼する・理解する	適切な表現で相手に受け入れられる (+)	依頼内容の重軽に応じて、対価を予め提示するなど、相手が快く依頼を受け入れる表現。
B1	ベトナムでの謝罪行動を理解し、適切に応じることができるとともに、自らも適切に謝罪することができる。	謝罪する・理解する	適切な表現で相手との関係を保つ (-)	謝罪と合わせて、言い訳する技術も必要。
B1	ベトナムでの感謝行動を理解し、適切に応じることができるとともに、自らも適切に感謝することができる。	感謝する・理解する	適切な表現で人間関係を良好に保つ (+)	定型句の謝罪表現の代わりに、ほめることなどで感謝を表すことがある。
B2	社会的立場、年齢、親疎に応じた関係性を総合的に踏まえ適切な人称表現を使用することができる。	人称表現を効果的に使う	人間関係を対話者の心理をつかむ (+)	相手が喜ぶ、満足、そして応じることができ、対話者とのコミュニケーションを上手く運べる。
B2	子、先祖の命日などベトナムの伝統的文化的行事に参加できる	慣用語、人称表現を適切に使う	ベトナム人との心理的距離を縮める (+)	ベトナム社会に根づく行事、風習の理解と参加。
B2	場面に応じて、話し言葉と書き言葉を適切に使分けことができる。	口語・文語の文体差を使い分ける	文体差で発話場面に最適化する (+)(-)	話し言葉と書き言葉で語彙、表現などの要素が異なる。
C1	婉曲的な表現を理解するとともに、言い難いことを失礼のない形で言うことができる。	婉曲的表現を効果的に使う	間接的発話行為により礼儀を保つ (-)	苦情を言う、不同意、指摘などを断る場合。
C2	ベトナムと話し言葉の社会・文化の差異を理解し、ビジネスやトラブル解決などの場面で効果的に仲介することができる。	仲介する	社会・文化の差異を理解できる (+)	お互いのコミュニケーションストラテジーの差異などを理解し、ベトナムのストラテジーに則した形で効果的にコミュニケーションを行う。
C2	物事を円滑に進めるための高滑油的表現を理解し、発することができる。	ユーモアなどを効果的に使う	人間関係を潤滑にする (+)	ベトナムの社会・文化に基づく笑いのツボや言葉遊びの理解と運用。
C2	対話者の理解を深めるための手段として、効果的に慣用語を使うことができる。	慣用語などを効果的に使う	ベトナム特有の表現で理解を助ける (+)	自他双方が自身の意図の理解促進のために使用するベトナムのことわざや慣用語の高度な運用。
C2	ベトナム各地の主要な方言に熟達し、円滑な人間関係を構築することができる。	方言、地域的話題を効果的に使う	地域差を理解し、人間関係を潤滑にする (+)	相手との共感、共鳴。
C2	ベトナムでタブーとされる話題を回避したコミュニケーションの展開。	タブー的話題を回避する	禁忌的表現を避けて人間関係を保つ (-)	注意を要する話題=党および政府への直接的な批判。なお、親しい間柄での本音トークも重要。

科研_社会・文化的適切性 科研_社会・文化的適切性CEFR表_ラオス語(報告書)

言語行動のタスク	社会・文化的方略	CEFRレベルの 目安	能力を判断する手がかり(Descriptors)	ラオス語の社会・文化的特質の補足的説明 (Supplements)
書面や口頭で表現し、理解できる	多様な文体を用いて効果を上げる	C2	効果的に滑溜油的表现である押韻表現を理解し、使うことができる。	押韻表現は美しい丁寧な表現として好まれる。好感度を上げたり、相互理解の手段として採用する。
口頭で表現し、理解できる	社会・文化の差異を理解できる	C2	対話者の理解を深めたり、物事を円滑に進めるための手段として、効果的に諺や慣用句を使うことができる。	自他双方が自身の意図の理解促進のために諺や慣用句を採用する。
仲介する	社会・文化の差異を理解できる	C2	社会・文化の差異を理解し、相談やトラブル解決などの場面で効果的に仲介することができる。	お互いのコミュニケーションストラテジーの差異などを理解し、ラオスのストラテジーに則した形で仲介する。
話題を選択する	社会・文化の差異を理解できる	C1	ラオス社会の旬の話題を理解し、お互いに意見交換をすることができる。	主な祭礼、タブーとされる話題について理解しておく。健康状態(生誕と逝去)、自然(災害・農作物の出来)時事ネタなどがよく話題になる。
公式文書を書く	文体差で場面に最適化する	C1	公式な文書として、状況や相手との関係に適した文章を書くことができる。	場面や読み手に応じた定型句や規定の書式がある。
公式の場で話す	文体差で場面に最適化する	C1	公式の場でスピーチや発表を行うことができる。	場面や聞き手に応じた定型句やスピーチ・発表の型がある。
口頭で表現し、理解できる	社会・文化の差異を理解できる	C1	社会・文化の差異を理解し、状況や相手との関係に適した表現を使うことができる。	年長者に対する適切な所作と共に礼儀上の慣習を意図して、婉曲表現や敬謙表現を適切に使う。
情報を求める	適切な社会関係を構築する	B2	上下関係や状況ごとの判断ができ、相手や第三者についての情報を求めることができる。	個人的な共通の知人の近況を聞くことで相手や周囲の人々との親疎関係を構築する。
文章を書く	文体差で場面に最適化する	B2	必要に応じて定型句を使い、適切な表現で自分の伝えたいことを表明できる。	
依頼をする	適切な社会関係を構築する	B2	依頼内容や相手に応じて適切な表現で依頼することができる。	相手の状況や能力に対する配慮表現や、相手の視点から述べるなどの敬謙表現や婉曲表現を使う。
意見を言う	適切な社会関係を構築する	B1	ある話題に対して自分の意見を述べたり、相手と円滑に意見交換ができる。	公式、非公式に関わらず、明確、且つ礼儀正しく話し合う。
断る	相手との関係を保つ	B1	相手が納得できる内容で依頼、勧誘・提案を断ることができる。	角が立たない理由(用事がある等)をまず言い、断りの表現はあまり使わない。一度目は受諾し、後日、断りの理由を述べることが多い。
情報を求める	相手との関係を保つ	B1	相手の得意なこと・休日の過ごし方や諸々の好みを確認できる。	具体的、かつ個人的なことを聞くことで、相手との心理的距離を縮める。
交渉する	適切な社会関係を構築する	B1	市場などでものを買う時、値段、数量や品目の交渉ができる。	市場等での値引き交渉は一般的で、行わないと売り手から催促されることもある。
受け入れる	相手との関係を保つ	B1	相手の依頼や勧誘に応じた表現を用いることができる。	
提案する	相手との関係を保つ	A2	定型句等を用いて適切に勧誘・提案ができる。	
依頼をする	相手との関係を保つ	A2	定型句等を用いて適切に依頼することができる。	
情報を求める	相手との関係を保つ	A2	相手の家族構成や職業を確認できる。	共通の話題を探すことにより、相手との会話の糸口を探したり、心理的な距離を縮めることができる。
挨拶する	適切な社会関係を構築する	A2	定型句以外の挨拶表現を使うことができる。無難な応えができる。	出会いや別れの挨拶表現(行き先・食事・既婚か未婚など)を使い、心理的な距離を縮めることができる。
話しかける	適切な社会関係を構築する	A2	相手との関係に応じて自分や相手に対して親族名称や愛称を適切に使用できる。	プライベートな場面では親族名称や愛称を使うことが多い。
話しかける	適切な社会関係を構築する	A2	社会的立場、年齢、親疎に応じた関係性を総合的に踏まえ、適切な人稱表現を使用することができる。	公的な場面では人稱調や職位+氏名を使うことが多い。
情報を求める	適切な社会関係を構築する	A1	相手についての簡単な情報を得ることができる。	氏名、出身地、年齢、民族、居住地などについて確認する。
自己紹介をする	適切な社会関係を構築する	A1	自分についての簡単な情報を与えることができる。	氏名、出身地、年齢、居住地などについて話す。
謝罪する	相手との関係を保つ	A1	謝罪の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	その場で謝罪する。応える側が先に「大丈夫・気にしないで」と言うこともある。小さな過ちについては言わない。
感謝する	相手との関係をよりよくなる	A1	感謝の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	その場で感謝する。後日、再度感謝することはない。
挨拶する	適切な社会関係を構築する	A1	定型句を使って挨拶する。	年齢や社会的地位の下の方が先に挨拶・合掌する。男性同士の場合は、年齢や社会的地位の上の方が先に手をさしのべて握手することが多い。

社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法をめぐって：アジア諸語版の試み（2018-2019）
 -アジア諸語を対象にしたCEFR受容で見えてきたものと捉えがたいもの-（富盛伸夫）

Issues on the communication ability evaluation method in consideration of socio-cultural characteristics: Asian Language Prototype (2018-2019) - What has been seen and What is hard to see in the Acceptance of CEFR for Asian languages - (Nobuo Tomimori)

カンボジア語: 社会・文化的適切性(案)		(+ Positive politeness; (-) Negative pol.		
CEFR難易度	Descriptors	言語行動のタスク	社会・文化的方略 (+) (-)	補足説明
C2	社会・文化の差異を理解し、物事を円滑に進めるための表現を理解し、発することができる	口頭で表現し、理解できる	モダリティや語用論的な効果を上げる	王族や僧侶への特別な語彙、言葉遊びを運用でき、タブーを回避できる
C2	場面に応じた文書が書ける	書面で表現できる	多様な文体を用いて効果を上げる	場面に応じた書式と表現を理解し運用できる
C1	公式な挨拶文や依頼文などを書くことができる	公式文書を書く	文体差で場面に最適化する	書き言葉特有の定型文を理解し運用できる
C1	公的な場で、スピーチや発表を行うことができる	スピーチを行う	文体差で場面に最適化する	慣用句やユーモアをまじえて話することができる
B2	相手を想定しない文書や指示文を書くことができる	文章を書く	文体差で場面に最適化する	
B2	公的な場で、自分の意見を表明できる	意見を言う	文体差で場面に最適化する	
B2	相手についての情報を婉曲的に求めることができる	情報を求める	適切な社会関係を構築する	
B1	定型のある文書を書くことができる	連絡文を書く	文体差で場面に最適化する	定型文を理解し運用できる
B1	理由をつけて丁寧に謝罪できる	謝罪をする	相手との関係を保つ	理由を述べて謝罪できる
B1	理由をつけて丁寧に断ることができる	断る	相手との関係を保つ	代案を提示するのがのぞましい
B1	買ひ物の値段、数量や品目や、課題の分量や期日の交渉ができる	交渉する	適切な社会関係を構築する	
A2	相手についての簡単な情報を求めることができる	情報を求める	適切な社会関係を構築する	適切な呼称のために必要な情報を求めることができる
A2	相手の依頼や勧誘に応じた表現を用いることができる	受け入れる	相手との関係を保つ	相手と同じ表現を用いて答えることができる
A2	相手の依頼や勧誘に応じた表現を用いることができる	断る	相手との関係を保つ	相手と同じ表現を用いて答えることができる
A2	礼儀正しい表現を選択できる	依頼をする	適切な社会関係を構築する	否定疑問文は用いない
A2	礼儀正しい表現を選択できる	勧誘する	適切な社会関係を構築する	否定疑問文は用いない
A2	定型句以外の表現も使うことができる	挨拶する	適切な社会関係を構築する	定型以外の表現も用いることができる
A1	自分についての簡単な情報を与えることができる	自己紹介する	適切な社会関係を構築する	名前、出身地、年齢、職業などについて話すことができる
A1	もっとも簡単な定型句を使うことができる	謝罪する	相手との関係を保つ	
A1	もっとも簡単な定型句を使うことができる	感謝する	相手との関係をよりよくする	日本語と異なり、その場で感謝し、後日、再度感謝することは少ない
A1	もっとも簡単な定型句を使うことができる	挨拶する	適切な社会関係を構築する	呼称を付けて丁寧にし、合掌する

マレーシア語コミュニケーションにおける社会・文化的適切性のレベルと能力評価項目（中間報告書）

言語行動のタスク	社会・文化的方略	CEFRレベルの目安	能力を判断する手がかり(Descriptors)	マレーシア語の社会・文化的特質の補足的説明 (Supplements)
仲介する	社会・文化の差異を理解できる	C2	マレーシア語と話者言語の社会・文化の差異を理解し、ビジネスやトラブル解決などの場面で効果的に仲介することができる。	お互いのコミュニケーションストラテジーの差異などを理解し、マレーシアのストラテジーに則した形で効果的にコミュニケーションを行う。
ユーモアをまじえる	人間関係を潤滑にする	C2	物事を円滑に進めるための潤滑油的表現を理解し、発することができ。	マレーシアの社会・文化に基づいたツボや言葉遊びの理解と運用。
慣用語などを効果的に使う	人間関係を潤滑にする	C2	対話者の理解を深めるための手段として、効果的に慣用語を使うことができる。	自己双方が自身の意図の理解促進のために使用するマレーシアのことわざや慣用語の高度な運用。
あいづちを打つ	相手との関係をよりよくする	C2	相手の発話に対し、適切な表現かつ頻度であいづちを打つことができる。	あいづちの頻度は言語や文化により異なり、打ちすぎると相手の発言を遅ることになり、うたなすぎると相手の発言に興味がない印象を与える。
公式の場で話す	文体差で場面に最適化する	C2	公式の場で司会、スピーチ、発表をすることができる。	公式な場面での話し言葉特有の表現や定型文がある。
公式文書を書く	文体差で場面に最適化する	C2	公式な挨拶文や依頼文などを書くことができる。	公式な場面での書き言葉特有の表現や定型文がある。
宮廷語を理解する	文体差で場面に最適化する	C2	宮廷語を理解することができる。	王族について使用する特別な語彙がある。
宗教的なことに注意して話す	社会・文化の差異を理解できる	C1	マレーシアでタブーとされる話題を回避したコミュニケーションの展開することができる。	注意を要する話題＝宗教批判および宗教(特にイスラム教)の教義に反する内容の積極的擁護
例による説明を理解する	社会・文化の差異を理解できる	C1	マレーシア人なら誰でも知っている文学作品、TV番組、芸能人などを例にした説明が理解できる。	マジカは賢い動物、シティヌルハリザは歌姫、ウビンとイピンは双子の兄弟。(日本語なら、サザエさんやドラえもんが登場人物を使った説明。英語なら、ハックルベリー・フィン?)
苦情を言う	相手との関係を保つ	C1	婉曲的な表現を理解するとともに、言い難いことを失礼のない形で言うことができる。	
話しかける	適切な社会関係を構築する	B2	社会的立場、年齢、親疎に応じた関係性を総合的に踏まえ適切な人称表現を使用することができる。	相手が喜ぶ、満足、そして応じることができ、対話者とのコミュニケーションを上手く運べる。
文体差に注意して話す・書く	文体差で発話場面に最適化する	B2	場面に応じて、話し言葉と書き言葉を適切に使い分けことができる。	話し言葉と書き言葉で語彙、修辞法、語順などの各種要素が多岐に渡り、非常に大きく異なる。
あいづちを打つ	相手との関係をよりよくする	B2	相手の発話に対し、適切な表現であいづちを打つことができる。	
依頼をする	相手との関係を保つ	B1	内容に応じて適切に表現で依頼することができる。	依頼内容の重軽に応じて、相手が快く依頼を受け入れる表現。
勧誘・提案をする	相手との関係を保つ	B1	相手に伝わるように、積極的な勧誘・提案ができる。	
依頼・勧誘・提案を断る	相手との関係を保つ	B1	相手が納得できる内容で依頼、勧誘・提案を断ることができる。	
謝罪をする	相手との関係を保つ	B1	マレーシアでの謝罪行動を理解し、適切に応じることができる。自らも適切に謝罪することができる。	
感謝する	相手との関係をよりよくする	B1	マレーシアでの感謝行動を理解し、適切に応じることができる。自らも適切に感謝することができる。	
ほめられる	相手との関係を保つ	B1	格別なほめ言葉は、謙遜して答え、そのまま受け入れない。	「そんなことないですよ」
不同意を示す	相手との関係を保つ	B1	自らは同意できない意見に対し、相手を直接的に否定せず、意見の対立を避ける。	「それはそうですが」
依頼をする	適切な社会関係を構築する	A2	定型句を用いて失礼にならないよう依頼することができる。	相手との心的距離によって定型句は異なるため、適切な表現を使用する必要がある。
挨拶する	適切な社会関係を構築する	A1	人間関係に応じて、定型句など失礼にならない程度の挨拶表現を使うことができる。	
ほめる	相手との関係をよりよくする	A1	相手の外見、言動で気付いた点を一言、ほめることができる。	社交辞令的に相手の外見で気付いた点を単語一言で言い、コミュニケーションのきっかけとする。
話しかける	適切な社会関係を構築する	A1	相手の属性や自らのとの関係を考慮し、失礼にならない自称・対称の表現を選択できる。	
謝罪する	相手との関係を保つ	A1	謝罪の定型句とそれに対応する定型句を使うことができる。	対人関係や謝罪の度合いによって定型句は異なるため、適切な表現を使用する必要がある。謝罪を受ける場合、相手側に責任がある場合であっても、まずこちら側が許すということを伝えるのが一般的な行為。
感謝する	相手との関係をよりよくする	A1	感謝の定型句とそれに対応する定型句を使うことができる。	対人関係や感謝の度合いによって定型句は異なるため、適切な表現を使用する必要がある。
あいづちを打つ	相手との関係をよりよくする	A1	相手の発話に対し、何らかの反応を示すことができる。	
家族について話す	適切な社会関係を構築する	A1	家族に関する話をするすることができる。	

社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法をめぐって：アジア諸語版の試み（2018-2019）
 -アジア諸語を対象にしたCEFR受容で見えてきたものと捉えがたいもの-（富盛伸夫）

Issues on the communication ability evaluation method in consideration of socio-cultural characteristics: Asian Language Prototype (2018-2019) - What has been seen and What is hard to see in the Acceptance of CEFR for Asian languages - (Nobuo Tomimori)

科研_社会・文化的適切性CEFR表_インドネシア語(中間報告書)

言語行動のタスク	社会・文化的方略	CEFRレベルの目安	能力を判断する手がかり(Descriptors)	インドネシア語の社会・文化的特質の補足的説明 (Supplements)
慣用句などを効果的に使う	人間関係を潤滑にする	C2	慣用句や格言を使うことができる。	
公式な文面で文書を書く	文体差で場面に最適化する	C1	公式な文章を書くことができる。	
口語・文語の文体差を使い分ける	文体差で場面に最適化する	B2	場面に応じて、話し言葉と書き言葉を適切に使い分けることができる。	書き言葉と話し言葉の差が大きく、場面に応じた使い分けが難しい。
意見を言う	文体差で場面に最適化する	B2	公的な場で、自分の意見を表明できる。	
依頼・勧誘・提案を断る	相手との関係を保つ	B1	相手が納得できる内容で依頼・勧誘・提案を断ることができる。	
勧誘・提案をする	相手との関係を保つ	B1	積極的な勧誘・提案ができる。	
宗教について説明する	適切な社会関係を構築する	A2	自分の宗教について説明することができる。	1つの宗教を信仰していることが当たり前であり、尋ねられることがよくある。
家族について説明する	相手との距離を縮める	A2	家族に関する話をするすることができる。	
趣味・好みを話題にする	相手との距離を縮める	A2	趣味や好みについて話したり確認することができる。	
情報を求める(値段)	適切な社会関係を構築する	A2	値段について情報を求めたり交渉したりすることができる。	金額が明示されていない場面(市場、乗合自動車など)では情報を求める必要がある。
依頼をする	相手との関係を保つ	A2	相手や場面に応じて適切な表現で依頼することができる。	
提案を受け入れる	相手との関係を保つ	A2	依頼や勧誘、提案を受け入れることができる。	
宗教について尋ねる	適切な社会関係を構築する	A2	相手の宗教について尋ねることができる。	
呼びかけ語を用いる	適切な社会関係を構築する	A1	相手に応じた適切な呼びかけ語を用いることができる。	年代、社会的地位、性別、状況に応じて適切な呼びかけ語を用いる必要がある。呼びかけ語は代名詞的にも用いられる。
自分のことを説明する	適切な社会関係を構築する	A1	名前や年齢、職業などの基本的な自己紹介ができる。	
年齢を話題にする	適切な社会関係を構築する	A1	相手の年齢を聞くことができる。	初対面で早い段階から年齢を話題にすることはあまりない。
家族を話題にする	適切な社会関係を構築する	A1	家族構成について基本的な説明ができる。	
住所を話題にする	適切な社会関係を構築する	A1	相手の住んでいるところを確認できる。	
出身や所属を話題にする	適切な社会関係を構築する	A1	自分の出身地や所属について説明できる、相手の出身地や所属の確認ができる。	
謝罪する	相手との関係を保つ	A1	謝罪の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	
感謝する	相手との関係を保つ	A1	感謝の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	
挨拶する	相手との関係を保つ	A1	挨拶の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	定型句によるやり取りの後にさらに応答を続けることがよくある。

タイ語コミュニケーションにおける社会文化的適切性のレベルと能力評価項目(中間報告書)

言語行動のタスク	社会・文化的方略	CEFR/レベルの目安	能力評価を判断する手がかり(Descriptors)	タイ語の社会文化的特質の補足的説明(Thai Supplements)
仲介する	社会・文化の差異を理解できる	C2	タイと話者言語の社会・文化の差異を理解し、ビジネスやトラブ解決などの場面で効果的に仲介することができる。	お互いのコミュニケーションストラテジーの差異などを理解し、タイのストラテジーに則した形で効果的にコミュニケーションを行う。
ユーモアなどを効果的に使う	人間関係を潤滑にする	C2	物事を円滑に進めるための潤滑油の表現を理解し、発することができる。	タイの社会・文化に基づく笑いや言葉遊びの理解と運用。
慣用句などを効果的に使う	タイ特有の表現で理解を助ける	C2	対話者の理解を深めるための手段として、効果的に慣用句を使うことができる。	他国双方が自身の意図の理解促進のために使用するタイのこわざや慣用句の高度な運用。
タブー的话题を回避する	禁忌的表現を避けて人間関係を保つ	C2	タイでタブーとされる話題を回避したコミュニケーションの展開することができる。	注意を要する話題＝王室批判、政治的主張など。
終結小辞を効果的に活用する	モダリティや語用論的な効果をもつ	C1	多様な終結小辞の文脈に応じた意味を正しく理解し、効果的に多様な終結小辞活用することができる。	終結小辞には、話し手と聞き手の属性や両者の関係、聞き手に対する働きかけ、話し手の出来事に対する心的態度を表す機能がある。
公式な文面で文書を書く	多様な文法を用いて効果を上げる	C1	公式な挨拶文や依頼文などを書くことができる。	書き言葉特有の表現や定型文がある。
王語を理解する	王族特有の文法を理解する	C1	王族だけが使用する言葉を理解することができる。	王族しか使用しない言葉がある。
婉曲的表現を効果的に使う	間接的表現行為により礼儀を保つ	C1	婉曲的な表現を理解するとともに、言い難いことを失礼のない形で言うことができる。	苦情を言う、不同意、指摘などをする場合。
仏教の話題を取り上げる	宗教の話題で相手との距離を縮める	C1	宗教、特に仏教の話題をすることができる。	仏教を中心によく話される。特に寺で徳を積んだ経験、仏教の教え、僧侶の説法などは話題となることが多い。タイでは話し相手はムスリムやキリスト教徒であったとしても、お寺で徳を積んだ話などは共通を持って、好意的に聞き入れられる。
仏教用語を理解し適切に使う	タイ人との心理的距離を縮める	B2	仏教用語を理解し、適切に使用することができる。	仏教の用語を正しく理解し、日常生活のコミュニケーションに組み込む。前世、現世、来世における転生、死んだ人のために徳を積むといった仏教の世界観に基づく語彙を多用し話される。
人稱表現を効果的に使う	人間関係を対話者の心理をつかむ	B2	社会的立場、年齢、親疎に応じた関係性を総合的に踏まえ適切な人稱表現を使用することができる。	相手が喜ぶ、満足、そして応じることができる。対話者のコミュニケーションをうまく導く。
終結小辞を効果的に使う	小辞により表現効果を高める	B2	社会的立場、年齢、親疎に応じた関係性を総合的に踏まえ適切な人稱表現を使用することができる。	終結小辞には、話し手と聞き手の属性や両者の関係、聞き手に対する働きかけ、話し手の出来事に対する心的態度を表す機能がある。
口語・文語の文体差を使い分ける	文体差で発話場面に最適化する	B2	場面に応じて、話し言葉と書き言葉を適切に使い分けすることができる。	話し言葉と書き言葉で語彙、語順などの各種要素が多岐に渡り、非常に大きく異なる。
依頼をする・理解する	適切な表現で相手に受け入れてもらう	B1	内容に応じて適切に依頼することができる。	依頼内容の重症に応じて、依頼を予め提示するなど、相手が快く依頼を受け入れる表現。
勧誘・提案をする	誠意を見せ相手に好意を示して誘う	B1	相手に伝わるように、積極的な勧誘・提案ができる。	誘いはあまりせずに、ポジティブな要素を述べて、誠意を全面的に見せながら誘う。かつ相手側の社交辞令的遠慮を理解した上で積極的に対応する必要がある。
依頼・勧誘・提案を断る	避けられない事情を話して負担をけない	B1	相手が納得できる内容で依頼、勧誘・提案を断ることができる。	直接的な断り方はあまりしない。どうしても断らざるを得ない時は、丁寧に断り、謝罪した後、断りの理由を添える。納得し悪い顔として、お寺に行くことや家族の事情などがあがる。
依頼をする・理解する	適切な表現で相手との関係を保つ	B1	タイでの依頼行動を理解し、適切に応じることができる。自らも適切に依頼することができる。	「すみません」に該当する直接的な謝罪表現だけではなく、むしろ婉曲的な表現が好まれる場合も多い。
感謝する・理解する	適切な表現で人間関係を良好に保つ	B1	タイでの感謝行動を理解し、適切に応じることができる。自らも適切に感謝することができる。	感謝は一度に大きく言い、後日、改めて言うことは少ない。定型句の謝罪表現の代わりに、ほめることなどで感謝を表すことができる。
一言添えて表現・行動をする	相手との心理的距離を縮める	A2	対話者に応じて、適切な合言葉、及び定型句+αの一言を添えることができる。	+αの一言＝家族の近況外見をほめることなどで対話者との距離を縮めることができる。
年齢確認をする	相手との社会的立場の確認ができる	A2	相手の年齢を婉曲的に聞くことができる。	年齢に年齢を聞くだけでなく、相手との関係性によって、卒業年、誕生日、干支等、聞き方を表せることもある。
年齢差による表現を用いる	タイ語特有の文法差により人間関係を保つ	A2	相手との年齢差で文体を変えることができる。	目上の相手には、終結小辞の1つである丁寧小辞を使用する。目下の相手は一人称も変化する。また、年上の方は、相手に気を使わせるため、カジュアルな終結小辞を使用する。
家族の話題を取り上げる	相手との心理的距離を縮める	A2	家族に関する話をするすることができる。	家族旅行の話は好意的に受け止められ、話題となることが多い。
趣味・好みを話題にする	相手との距離を縮める	A2	相手の趣味や好みを聞くことができる。	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手との距離を縮める。
(売買などで)交渉する	タイの慣習にあった表現で円滑に交渉する	A2	市場などでの買付時、値段、数量や品目の交渉ができる。	市場場での値引き交渉は一般的であるが、定価が表示されているザバート、スーパー、コンビニ等では行わない。
依頼をする・理解する	人間関係に従った定型句で礼儀を保つ	A2	定型句を用いて失礼にならないよう依頼することができる。	相手との心的距離によって定型句は異なるため、適切な表現を使用する必要がある。
提案を受け入れる	謙遜な態度を示して相手に負担をけない	A2	礼儀正しく依頼、勧誘・提案を受け入れることができる。	すぐに勧誘や提案を受けるのではなく、数回遠慮した後依頼・提案を受け入れるのが一般的。
定型句で挨拶する	定型表現により人間関係を配慮する	A1	人間関係に応じて、定型句など失礼にならない程度の挨拶表現を使うことができる。	挨拶の構成要素＝定型句、人稱表現、終結小辞。
相手についてほめる	言語的に好意を示すことで円滑になる	A1	相手の外見、行動で賞賛した点を一言、ほめることができる。	社交辞令的に相手の外見で賞賛した点を単語一言で良いので、コミュニケーションのきっかけとする。
人稱表現を使う	相手との社会的立場で礼儀を保つ	A1	相手との関係を考慮し、失礼にならない程度、人稱表現を使うことができる。	自己紹介したり、簡単なやりとりをする際には相手との関係で失礼にならない程度の人稱表現を用いる。
親族名の呼称を用いる	親族名で呼ぶことで相手との距離を縮める	A1	相手との心的距離を縮める適切な呼称を使う。	近親親族意識が強く、「おばあさん」「おじいさん」「子どもたち」といった親族名を使って相手と呼ぶ範囲が広い。フォーマルで丁寧な呼称を使い続けていると、相手との距離が縮まらない。
愛称を用いる	相手の愛称を知り、積極的に用いることで相手との心理的距離を縮める	A1	相手の愛称を尋ねて、愛称を適切に使うことができる。	ほぼ全てのタイ人は生まれた時に愛称をつけられる。家族、友人だけではなく、職場でも普通に愛称が使用され、状況によっては一人称としても愛称を使うことが一般的。本名よりも愛称で呼び合う方が、距離が近い印象となる。逆に相手の愛称を聞かないと、距離を置かれている印象となる。
丁寧小辞を使う	丁寧表現を使うことで人間関係を配慮する	A1	丁寧小辞を適切に使うことができる。	終結小辞として、節や語の束末につける他、単独で返事にも使用し、話し手の発話や、丁寧、礼儀正しい、思慮深い、柔和といった印象を与えるものとする。そのため、自らの高い社会的地位や立場に相応しい印象を与えるためにも使用する。
文体差(性別)を区別する	男女の文体の違いを理解して配慮する	A1	終結小辞や人稱表現により男女の文体の差を区別できる。	終結小辞や人稱表現で差別化を行うが、語彙に大きな差はない。
自分のことを説明する	自身のプライバシーに共有することで心理的距離を縮める	A1	名前や年齢、職業などの基本的な自己紹介ができる。	年齢や職業、出身地など、出来る限り、具体的なことを自発的に言うことで、相手との距離が縮まる。
年齢を話題にする	社会的立場の確認男女の文体の違いを理解して配慮する	A1	相手の年齢を聞くことができる。	タイ語の特徴として、相手の年齢に応じて、人稱代名詞(一人称、二人称)を変化させる必要がある他、言葉遣いも行動も変化する。
家族を話題にする	相手のプライバシーに敬って踏み込むことで心理的距離を縮める	A1	家族構成などプライベートなどについて、または返答ができる。	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手との距離を縮め、そこで入手した情報をもとに、今後のコミュニケーションにも活用し、より良い関係構築を行う。
住所を話題にする	相手のプライバシーに敬って踏み込むことで心理的距離を縮める	A1	相手の住んでいることを確認できる。	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手との距離を縮める。
社会的地位を話題にする	社会的立場の確認をして適切な社会関係を構築する	A1	相手の社会的立場(職業、学歴など)を確認できる。	社会的地位、特に職業については、適切な呼称のために必要。学歴も相手との距離感を形成する上で大きな影響を及ぼす。同意の場合、仲間意識、共感が増す。それによって付き合い方や言語行動(人稱代名詞、終結小辞)などが変わる。
謝罪をする	定型句を用いつつ謝罪を受け入れる態度を示して相手との関係を保つ	A1	謝罪の定型句とそれに対応する定型句を使うことができる。	対人関係や謝罪の度合いによって定型句は異なるため、適切な表現を使用する必要がある。謝罪を受ける場合、相手側に責任がある場合であっても、まずこちら側が許すということを示すのが一般的な行為。
感謝する・理解する	定型句を用いて謝意を大きく示して相手との関係をよりよくなる	A1	感謝の定型句とそれに対応する定型句を使うことができる。	対人関係や感謝の度合いによって定型句は異なるため、適切な表現を使用する必要がある。

社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法をめぐって：アジア諸語版の試み（2018-2019）
 -アジア諸語を対象にしたCEFR受容で見えてきたものと捉えがたいもの-（富盛伸夫）

Issues on the communication ability evaluation method in consideration of socio-cultural characteristics:Asian Language Prototype (2018-2019)-What has been seen and What is hard to see in the Acceptance of CEFR for Asian languages-
 (Nobuo Tomimori)

ビルマ語コミュニケーションにおける社会・文化的適切性のレベルと能力評価項目（中間報告書）

言語行動のタスク	社会・文化的方略	CEFRレベルの目安	能力を判断する手がかり(Descriptors)	ビルマ語の社会・文化的特質の補足的説明 (Burmese Supplements)
謝辞	人間関係を潤滑にする	C2+	授け言葉を理解できる、作り出せる。	授け言葉とは2音節(以上)の韻母を即興で入れ替える言葉遊び。
謝辞	人間関係を潤滑にする	C2	物事を円滑に進めるための潤滑油的表現を理解し、発することができる。	ミャンマーの社会・文化に基づいた(笑いの)ツボや言葉遊びの理解と運用。
口頭で表現し、理解できる	社会・文化の差異を理解できる	C2	ミャンマーと話者言語の社会・文化の差異を理解し、ビジネスやトラブル解決などの場面で効果的に仲介することができる。	お互いのコミュニケーションストラテジーの差異などを理解し、ミャンマーのストラテジーに則した形で効果的にコミュニケーションを行う。
口頭で表現し、理解できる	社会・文化の差異を理解できる	C2	対話者の理解を深めるための手段として、効果的に復句を使うことができる。	自他双方が自身の意図の理解促進のために使用するミャンマーのこゝろや慣用語の高度な運用。
書面で表現できる	多様な文体を用いて効果を上げる	C2	場面に応じて、話し言葉と書き言葉を適切に分けることができる。	話し言葉と書き言葉で語彙、語順などの各種要素が多岐に渡り、非常に大きく異なる。
口頭で表現し、理解できる	社会・文化の差異を理解できる	C2	尊敬と適切に会話ができる。	尊敬との会話で使わなければならない語彙や呼びかけ語などを正しく理解し、使用することができる。また適切な態度を取ることができる。
謝辞	人間関係を潤滑にする	C1	定型的(予定調和的な)冗談、はやっている文句が理解できる。	ミャンマーの社会・文化に基づいた(笑いの)ツボや言葉遊びを理解したり、使ったりすることができる。
公式文書を書く	文体面で場面に最適化する	C1	公式な挨拶文や依頼文などを書くことができる。	書き言葉特有の定型文を理解し運用できる。
スピーチを行う	文体面で場面に最適化する	C1	公的な場で、スピーチを発表を行うことができる。	スピーチに特有の表現を使いこなせる。
口頭で表現し、理解できる	社会・文化の差異を理解できる	C1	仏教用語を理解し、適切に使用することができる。	仏教の用語を正しく理解し、日常生活のコミュニケーションに織り込む。
話題を選択する	社会・文化の差異を理解できる	C1	ミャンマーでタブーとされる話題を回避したコミュニケーションができる。(2)	細かい社会的習慣について理解し、回避すべき発言を避ける。
口頭で表現し、理解できる	社会・文化の差異を理解できる	B2	宗教、特に仏教の話題の話を理解し、話することができる。	人によって宗教上の善行や修行の話題を好む、あるいは悪行についての話をすることがある。興味の有無にかかわらず、相手の意図を肯定する。
文章を書く	文体面で場面に最適化する	B2	相手を想定しない文章や指示文を書くことができる。	口語体で正しい文章を書くことができる。
意見を言う	文体面で場面に最適化する	B2	公的な場で、自分の意見を表明できる。	
依頼をする	適切な社会関係を構築する	B2	内容に応じて適切に表現で依頼することができる。	相手の状況や能力に対する配慮表現や、他の人ではダメだ、という表現を先に言うことが多い。ミャンマーでは頼しい仲では依頼を受けるのが当然とされる。
連絡文を書く	文体面で場面に最適化する	B1	定型のある文章を書くことができる	定型文を理解し運用できる
謝辞をする	相手との関係を保つ	B1	状況に応じて謝辞の言葉を述べるかどうかを判断し、述べる場合は適切な表現を用いることができる。述べない場合も、間接的に感謝の意を表すことができる。	そもそも「謝辞」は極めて重い行為。通常は軽い謝罪表現をするか、自分はやることはやった、状況的に仕方がなかった、意図的ではない、という言い方になることが多い。
感謝する	相手との関係を保つ	B1	状況に応じて感謝の言葉を述べるかどうかを判断し、述べる場合は適切な表現を用いることができる。述べない場合も、間接的に感謝の意を表すことができる。	相手の好意がなかったら困ったことになった、という表現で感謝の気持ちを表す。
話題を選択する	社会・文化の差異を理解できる	B1	ミャンマーでタブーとされる話題を回避したコミュニケーションができる。(1)	宗教批判、宗教を疑めること、性的な内容(男性から女性)。
挨拶する	適切な社会関係を構築する	A2	状況に応じた挨拶やそれに対する返答ができる。	家族や仕事、勉強の様子を訪ねることがある。
話題を選択する	社会・文化の差異を理解できる	A2	生まれた曜日を知ることができる。	曜日の指称を話題にしたり、名付けを話題にしたり、仏教での参拝場所が決まったりする。
情報を求める	適切な社会関係を構築する	A2	相手についての簡単な情報を求めることができる。	直接年齢を聞くことは少なく、卒業年(入学年)、誕生日を聞く。また同じ年の生まれた場合、誕生日を聞いて、どちらが上かを確認することもある。
情報を求める	相手との関係を保つ	A2	相手に忌避する食材を確認する。	この質問をする上での、食材を表す語彙を知っていることが重要。
依頼をする	相手との関係を保つ	A2	定型句を用いて失礼にならないよう依頼することができる。	
提案をする	相手との関係を保つ	A2	定型句等を用いて、適切に勧誘・提案ができる。	
受け入れる	相手との関係を保つ	A2	相手の依頼や勧誘に応じた表現を用いることができる	提案や依頼は、よほどの理由がない限り断らない。
断る	相手との関係を保つ	A2	相手が納得できる内容で依頼、勧誘・提案を断ることができる。	角が立たない理由(真実かどうかに関わらず)をまず言い、断りの表現はあまり使わない。言葉の最後を濁すことが多い。
情報を求める	適切な社会関係を構築する	A1	相手についての情報を婉曲的に求めることができる	地位や収入などを訊くことはしない。(外国人に対しては謙虚なQ&A)曖昧な答え方をするのが普通。
情報を求める	適切な社会関係を構築する	A1	相手の住んでいるところを確認できる。	共通の話題を探ることにより、相手との会話の糸口を探したり、心理的な距離を縮めることができる。
情報を求める	適切な社会関係を構築する	A1	相手の学歴・出身校などを聞いて確認できる。	共通の話題を探ることにより、相手との会話の糸口を探したり、心理的な距離を縮めることができる。
挨拶する	適切な社会関係を構築する	A1	人間関係に応じて、定型句など失礼にならない程度の挨拶表現を使うことができる。	挨拶の構成要素=定型句、人称表現、発話末動詞、オウム返し(会話)、もしくは定型句等よりあえず無難な返答ができる。
語彙を選択する	適切な社会関係を構築する	A1	自分の性別に応じた自称名詞を選択できる。また相手が親族名詞を使った際に、誰を指しているのか理解できる。	
語彙を選択する	適切な社会関係を構築する	A1	相手の名前(の一部)を尋ねて、それを適切に使うことができる。	
語彙を選択する	適切な社会関係を構築する	A1	丁寧さを表す表現(ある程度)適切に選択して使える。	丁寧さを表す動詞や、発話末動詞。
注意を引く	適切な社会関係を構築する	A1	知らない人、あまり親しくない人に対する対称として適切な親族名詞を使って呼ぶことができる。また相手が親族名詞を使った時に、誰を指しているのかが分かる。	
謝辞をする	相手との関係を保つ	A1	謝辞の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	謝辞はその時に(軽く)言うか、もしくは言わない。
感謝する	相手との関係をよりよくする	A1	感謝の定型句とそれに応える定型句を使うことができる。	感謝はその時に(軽く)言うか、もしくは言わない。後日、改めて言うこともまずない。